松江市文化財調査報告書第49集

文化財愛護
シンボルマーク

# 向荒神古墳発掘調査報告書

1992年3月

松江市教育委員会

ＳＫ－０１出土秋草双鳥鏡

# 例　　言

1．本書は，平成２年度において松江市教育委員会が実施した向荒神古墳発掘調査にかかる報告書である。

2．本調査は，松江市教育委員会が有限会社豊和不動産の委託を受けて実施したものである。

3．調査の組織は下記のとおりである。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 委託者 | 有限会社豊和不動産 | 代表取締役 | 木村　勝吉 |
| 受託者 | 松江市代表者 | 松江市長 | 石倉　孝昭 |
| 主体者 | 松江市教育委員会 | 教 育 長 | 諏訪　秀富 |
| | | 教育次長 | 北村　悦男 |
| | | 社会教育課長 | 杉原　精訓 |
| | | 文化財係長 | 岡崎雄二郎 |
| 調査担当者及び調査員 | | 同　主事 | 飯塚　康行 |
| | | | 中尾　秀信 |
| | | 同　嘱託員 | 稲田　　奨 |

4．調査の実施にあたっては，次の方々の指導と協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

調査指導　　三浦　清氏（島根大学教育学部教授），前田　洋子氏（大阪市立博物館学芸員）

調査協力　　落部　直正（有限会社豊和不動産），狩野　忠志（同），小谷　浩和（同）

5．出土遺物はすべて松江市教育委員会で保管している。

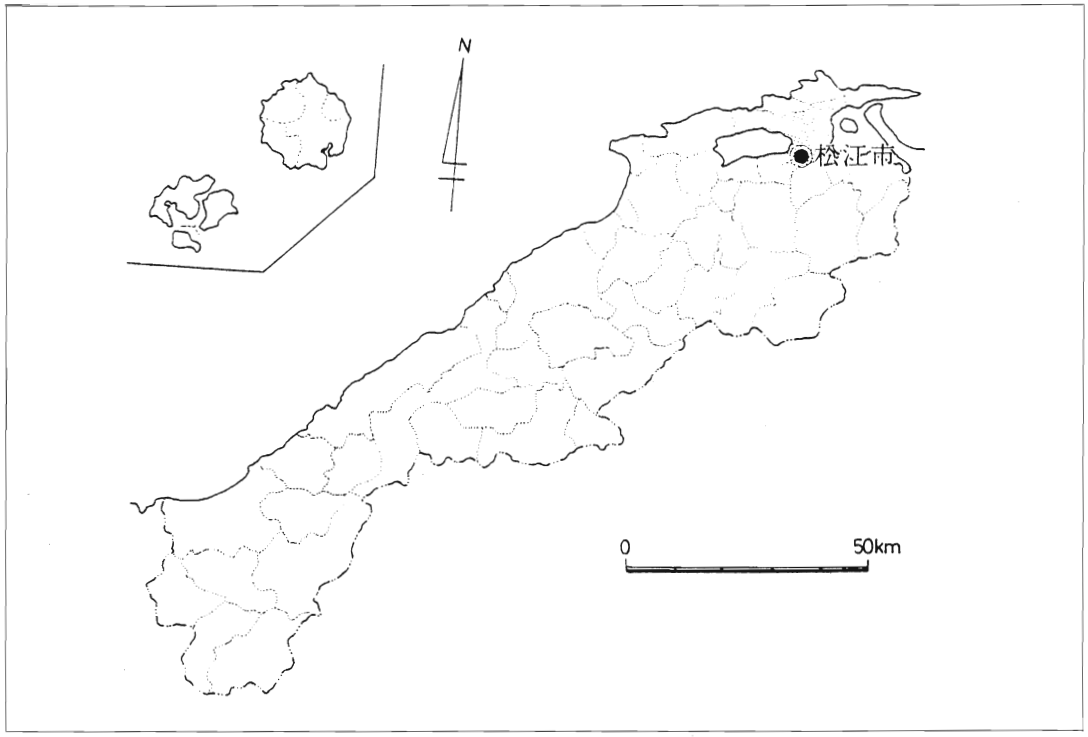
6．本書の編集及び執筆，図面の浄書等は飯塚，中尾がこれを行った。

**文化財愛護シンボルマークとは……**

このマークは昭和41年５月26日に文化財保護委員会（現文化庁）が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である斗栱（ときょう）、すなわち斗（ます）と栱（ひじき）の組み合わせによって全体で軒を支える腕木の役をなす組物のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していこうというものです。

文化財愛護
シンボルマーク


N
松江市
0
50km

（島根県地図）

西浜佐陀町
平松
中口
堂形町
平島町
天神
西津田町
東津田町
古志原町
上乃木町
向荒神古墳
大庭町
竹矢町
大草町
出雲
佐草町
乃白町

（松江市地図）

# 目　　次

1．調査に至る経緯 …… 4

2．周辺の歴史的環境 …… 4

3．調査の概要

(1) 昭和55年度の調査 …… 10

ア．遺構について …… 10

イ．出土遺物について …… 13

(2) 平成２年度の調査 …… 15

ア．墳丘について …… 15

イ．周濠について …… 15

ウ．主体部について …… 16

エ．出土遺物について …… 23

4．出土遺物の検討

(1) 古銭について …… 27

(2) 和鏡について …… 29

5．小　　結 …… 30

# 1．調査に至る経緯

向荒神古墳は松江市上乃木町2,141－1番地に所在する古墳である。従昔から一辺18mの方墳として知られ，「荒神さん」として地元の人々に祀られてきた。

本墳は，乃木二子塚古墳，二子塚古墳，長砂古墳群が存在する丘陵の北方低丘陵上の尾根筋をわずかにはずした山寄せの形態で立地する。墳頂部の標高は18.4mを測る。本墳西側には未舗装の幅2mほどの市道当貫野田線が通っており，墳丘北西角部分はこの道路によって削平されている。墳丘および東側斜面は竹林で覆われており，墳頂部にはさしわたし5m×7mほどの平坦面を有する。

昭和55年度において，市道当貫野田線拡張工事の際に松江市教育委員会によって，昭和55年9月16日から昭和56年2月2日までの計27日間，路線計画区域内の発掘調査が実施された。その結果，古墳にともなう周濠が発見され，墳丘本体は一辺15mの方墳であることが確認された。またこの調査に際して周濠中から古墳時代後期の須恵器甕片，奈良時代後期の須恵器坏身，平安時代の平底の壺が出土したが，この古墳の築造年代を断定することはできなかった。

その後平成2年度において有限会社豊和不動産が住宅団地の造成を計画した際，この古墳が開発区域内に含まれたいたため，松江市教育委員会では工事に先立って発掘調査を実施することとなった。調査期間は平成3年1月16日から平成3年3月23日までの計35日間である。

# 2．周辺の歴史的環境

## 1．向荒神古墳

発掘調査の前段階では，一辺18mの方墳と考えられていた。墳頂には「たび」の古木があって荒神さんが祀られている。

## 2．野田遺跡

向荒神古墳西側に隣接した野田地区で，地表面に須恵器・土師器片の散布する地域であっ

**第 3 図　周辺の遺跡分布図**

1. 向荒神古墳　2. 野田遺跡　3. 経塚古墳　4. 下沢遺跡　5. 乃木二子塚古墳　6. 二子塚古墳　7. 長砂古墳群
8. 向原古墳群　9. 友田遺跡　10. 南友田遺跡　11. 後友田遺跡　12. 潜松古墳推定地　13. 田和山古墳群
14. 薬師前遺跡　15. 運動公園内古墳群　16. 奥山遺跡　17. 大久保遺跡　18. 大久保古墳群　19. 神田遺跡
20. 渋ケ谷遺跡　21. 渋ケ谷古墳　22. 勝負谷遺跡　23. 勝負谷古墳群　24. 深田遺跡

た。昭和55年度に向荒神古墳とともに調査を行ったが，後世の畑地の耕作により攪乱を受けており，遺構は発見されなかった。

### 3．経塚古墳

すでに消滅しており，方墳であること以外不明。

### 4．下沢遺跡

乃木二子塚古墳の墳丘東側直下の畑地一帯の散布地で，黒曜石製石鏃，スクレイパー石片や須恵器片，古式土師器片が出土しているが，明確な遺構は確認されていない。

### 5．乃木二子塚古墳

南部より派生する低舌状丘陵の突端を切削し，周濠を穿つとともに盛土を施して造った前方後方墳である。昭和56年度に松江市教育委員会によって墳丘周囲をトレンチにより調査された。その結果，中軸長36m，前方部長14m，前方部高2.25m，後方部長22m，後方部高４mの規模を持つことが判明した。また墳丘くびれ部から高坏形器台や，周濠中から須恵器片が検出された。いずれも６世紀前半を中心とした時期のものである。

### 6．二子塚古墳

二子塚古墳は，乃木二子塚古墳の西方に隣接して築造された一辺約18m，盛土高２m以上の方墳である。松江市教育委員会によって昭和57年度に調査された。その結果，主体部は後世の攪乱により形態は不明であるが，わずかに短刀と鉄鏃の破片が残存していた。墳丘表土や周溝中からは須恵器片，円筒埴輪片が多数出土しており，その時期から山本編年のⅡ期からⅢ期の過渡期に築造された古墳であることが推定される。また，注目される点としては，墳丘基盤上から土師器の広口壺，盌が１個体ずつ並置して検出されたことで，古墳築造直前の地鎮祭のようなお祭りの際に供献されたものであると考えられる。

### 7．長砂古墳群

長砂古墳群は，乃木二子塚古墳のすぐ南側に派生する比較的平坦な丘陵に立地する。計17基の方墳が所在し，それは４群に分かれる。第１支群は４基からなる。第２支群は７基，第３支群は５基，第４支群は１基からなる。乃木土地区画整理事業のため，昭和55年度において発掘調査が実施された。その結果，いずれも一辺５～15m程度，高さ0.5～1.5mほ

どの小規模～中規模の方墳で，盛土の比較的高い位置に狭小でいびつな土壙を有する。主体部，墳裾，周溝中からの出土遺物はいずれも5c中～後にかけてのものであり，本古墳群は極めて短期間のうちに連続継起的に築造されたものであると考えられる。

## 8．向原古墳群

向原古墳群は，長砂古墳群，乃木二子塚古墳，二子塚古墳が存在する丘陵から谷を隔てた西方にのびる舌状丘陵の北部に存在し，昭和57年度において松江市教育委員会によって調査された。その結果，一辺6.0～8.85mの方墳２基と，直径2.0～9.0mの円墳２基からなる古墳群で，出土遺物からいずれも山本編年のⅠ期に築造されたものであることが考えられる。

## 9．友 田 遺 跡

向原古墳群の存在する丘陵南側で発見され，昭和56～57年度に松江市教育委員会によって調査された。その結果，弥生時代中期～後期の墳丘墓６基，25基からなる土壙墓群，四隅突出型方型墓１基が検出された。このうち中期の墳丘墓群と土壙墓群とは隣接しながらも明確に墓域を分けており，墳丘を持つ集団と持たない集団との階層分化が墓制に明確に現れている。しかし，弥生時代後期後半に築造されたと推定される四隅突出型方型墓については，土壙墓群を無視してその上に築造されており，土壙墓群断絶の後におそらく別の集団が築造したものと考えられる。

## 10．南友田遺跡

友田遺跡の南側で発見された遺跡で，昭和57年度に松江市教育委員会によって調査された。その結果，弥生時代前期後半と，古墳時代終末期頃の土器が出土した。住居跡の存在した可能性が考えられるが，明確な遺構は検出されなかった。

## 11．後友田古墳

友田遺跡の南方約１㎞の地点にある古墳で，昭和56年度に松江市教育委員会によって調査された。その結果，出土遺物より山本編年Ⅰ期に築造された円墳らしいことがわかったが，古墳西側半分は崩壊しており，更に墳頂部には四等水準点が設けられていたため，古墳の規模，主体部の詳細は不明であった。

## 12．潜松古墳推定地

後友田古墳の南側に所在し，昭和56年度に松江市教育委員会によって調査された。その結果，古墳と判断する材料がなく，遺物も検出されなかったため，古墳でないものと判断された。

## 13．田和山古墳群

長砂古墳群から西方の小さな独立丘陵上に存在する古墳群で，古墳12基，神社跡地１所，土壙墓群の可能性がある散布地１所がある。平成元年５月において民間の宅地造成が計画された際，この古墳群の文化財的価値を確認するため，平成２年度において松江市教育委員会によって丘陵中心部に存在する田和山１号墳の発掘調査が実施された。その結果，全長20m，後円部径12m，前方部長８m，高さ２mの前方後円墳であることがわかった。内部主体として後円部に北に開口した長さ2.4m，幅1.7mの横穴式石室をもつことがわかった。出土遺物は直刀２，短刀１，鉸具（かこ）１，鉄鏃10，ガラス小玉７，坏蓋８，坏身４，提瓶２が検出された。これらの時期から６世紀後半に築造された古墳であることがわかった。またこの調査によって本墳を含む田和山古墳群は，古代の乃木地区の地域性と経済状態を知る上での貴重な遺跡であることがわかったため，現状保存されることとなった。

## 14．薬師前遺跡

詳細は不明であるが，須恵器，土師器とともに弥生土器が採集されている。

## 15．運動公園内古墳群

運動公園造成の際に消滅しており，現在方墳数基を残すのみである。

## 16．奥 山 遺 跡

島根女子短期大学移転の際に発見された遺跡で，昭和62年度に島根県教育委員会によって調査された。その結果，東向き斜面の谷奥部で３穴の横穴墓が発見され，Ｂ－Ⅱ号横穴からは鍠元に花形紋様の象嵌を施す全長114cmの太刀が検出された。出土遺物から７世紀初頭を中心とした横穴群であることが考えられる。

## 17．大久保遺跡

大久保池南辺で土師器片等が採集された散布地である。

## 18．大久保古墳群

大久保池と菅沢池との中間の丘陵上に存在する古墳である。前方後円墳１基，方墳３基が確認されている。

## 19．神 田 遺 跡

（仮称）南新設中学校の建設が計画された際に，松江市教育委員会がトレンチによる試掘調査を実施した結果発見された遺跡である。調査の結果，ピット，土壙状遺構，溝状遺構が多数検出された。出土遺物としては５世紀後半～７世紀代の須恵器を中心とする土器類があり，また窯体状塊も検出されたことから，住居跡や窯跡などの生産遺跡の存在が推定される。

## 20．渋ヶ谷遺跡

（仮称）南新設中学校の建設が計画された際に，松江市教育委員会がトレンチによる試掘調査を実施した結果発見された遺跡である。調査の結果，住居跡状の落込みや溝状遺構，それに伴う須恵器，土師器が検出され，住居跡の存在が推定される。

## 21．渋ヶ谷古墳

（仮称）南新設中学校の建設が計画された際に，松江市教育委員会がトレンチによる試掘調査を実施した結果発見された遺跡である。調査の結果，一辺８ｍ，高さ１ｍの方墳で，墳丘中心部に木棺直葬の主体部と思われるプランが検出された。

## 22．勝負谷遺跡

（仮称）南新設中学校の建設が計画された際に，松江市教育委員会がトレンチによる試掘調査を実施した結果発見された遺跡である。調査の結果，丘陵尾根筋と平行に岩盤を加工した溝状遺構が検出された。出土遺物は須恵器片であった。

## 23．勝負谷古墳群

（仮称）南新設中学校の建設が計画された際に，松江市教育委員会が分布調査を実施した結果，丘陵頂部付近に２ヶ所，先端部付近に１ヶ所古墳と思われる地形が発見された。

### 24．深田遺跡

（仮称）南新設中学校の建設が計画された際に，松江市教育委員会がトレンチによる試掘調査を実施した結果発見された遺跡である。窯状遺構とピット３穴が検出され，角釘や陶磁器片が検出された。

# 3．調査の概要

## (1) 昭和55年度の調査

昭和55年度の調査は，工事によって削平される部分について，地山面まで掘り下げ，古墳の周濠の有無，古墳の平面形，古墳に関係すると思われる遺構・遺物の確認に主目的を置き，古墳本体については調査しなかった。

### ア．遺構について

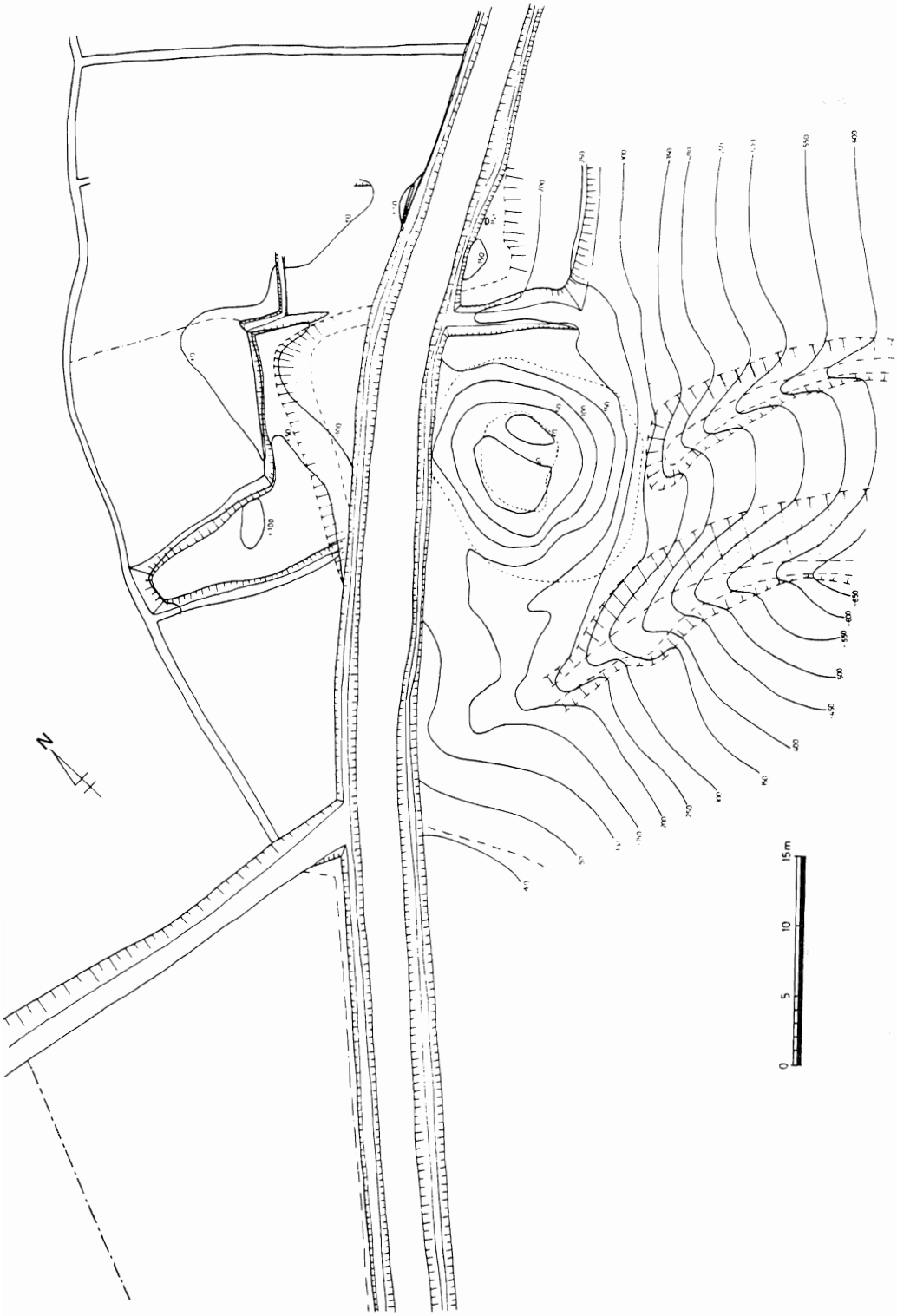
古墳の南側隣接地について，Ａトレンチを設定し，調査したところ，深さ96cm，上端幅4.16m，下端幅86cmの濠が確認された。濠内の堆積土は一様に黒褐色土であった。

これは，南北方向に走り，しかも古墳の西側斜面に平行していることから，これが向荒神古墳の西側の周濠に相当するものと断定した。さらに周濠の屈折部を確認するため，Ａトレンチの東側竹林内にＢトレンチを，西側市道部分にＣトレンチを設定した。Ｂトレンチではその東端付近で濠の上端の線が，ほぼ直角に折れ曲がっていることを確認した。

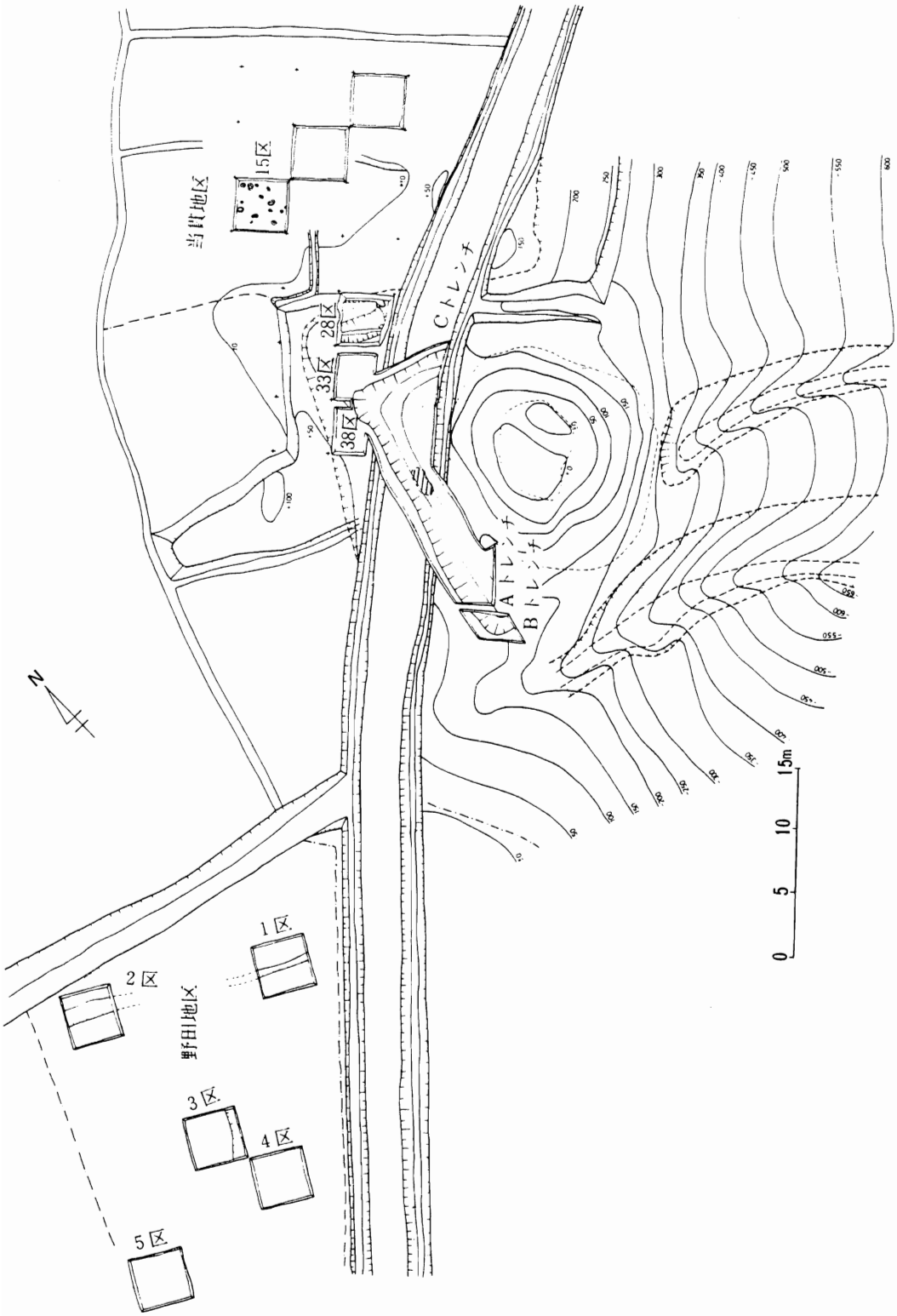
Ｃトレンチでは，周濠はまっすぐ市道の下を走り，対岸の山林に続いている。この部分では，市道によって後世上部が削平されているので，濠は下半部がわずかに遺存していたに過ぎない。市道直下での濠の現存上端幅は１m，下端幅は1.7m，深さは28cmほどを測る。

市道の下を走る濠は，対岸の山林に設定したグリッドの一部で直角に屈折し，再び市道の下をくぐり，古墳の北側に向けて一直線に走っている。

このことから周濠の屈折部が２ヵ所あり，その内側下端すなわち墳裾での一辺は18mあることが確認された。そして，濠の横幅は，市道部分では削平され不明確であるが，古墳の南側で確認したところ，上端幅4.16m，下端幅0.86m，深さ96cmの比較的大規模な周濠であることが分かった。また，周濠の底部のレベルは，水平ではなく西側に向けて高くなる傾向がある。すなわち，東の屈折部付近より，西の屈折部の方が50cm高いことが分かっ




第 4 図　昭和 55 年度向荒神古墳調査前地形測量図




第 5 図　昭和 55 年度向荒神古墳調査成果図

た。このことは本古墳が，現地形から推測して，台地の中央尾根部というよりは，やや東向きの斜面に立地しているにもかかわらず，濠の深さを絶対的に水平とせず，旧地表から相対的に一様のものとしたためと思われる。

結果としては，排水機能としての性格は後世まで十分に温存されていたと考えられる。それは，後述するように，Ａトレンチの濠底に密着して奈良後期から平安期にかけてのものと思われる糸切底の坏身の破片が，また，Ｃトレンチの市道直下の濠底では平底の壺が一括発見されたことにより，少なくともその頃までは殆ど周濠に堆積物はなかったと考えられる。

**イ．出土遺物について**

1．**壺**　推定器高33.6㎝，推定口縁径15.6㎝，頸部径9.6㎝，体部最大径26㎝，底部径10.4㎝を測る。体部の一部と口縁端部，底部の大半を欠失している。

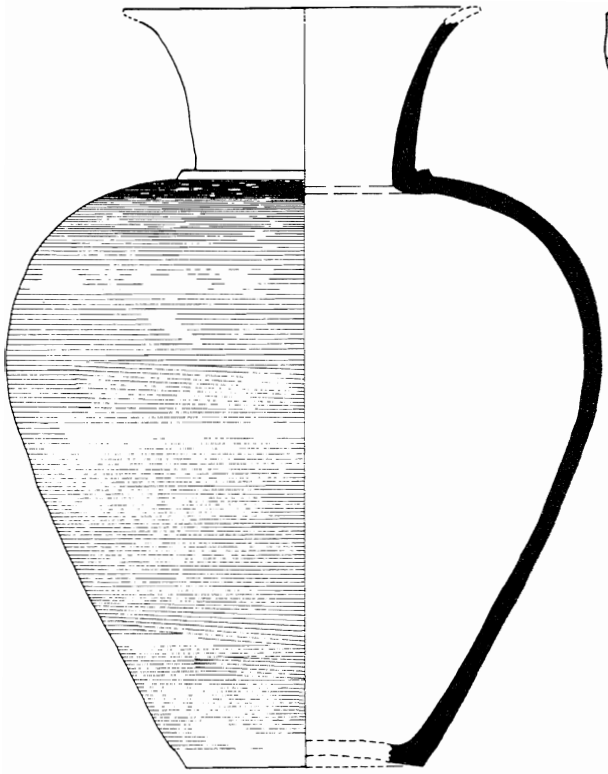
Ｃトレンチの濠底から出土。2.5ｍ×１ｍの範囲に集中していた。体部外面は，全体に水平方向のカキ目調整を施している。体部内面はおおまかに横ナデ調整を施し，器内を叩きしめた形跡はない。底部は平底でやや上げ底となる。底外面の調整はナデている。頸部には高さ３㎜ほどの突帯がまわる。口縁部は外反しその端部は，遺存していないので不明だが，単純口縁もしくは突帯を付けた肥厚口縁が考えられる。この種の須恵器は県内，県外共に類例がなく比較出来ないが，短頸壺の器形の影響を受けており，頸部の突帯と底部は平底である点が特徴である。これらの点からこの須恵器はおおむね９世紀以後の所産になるものと思われる。

2．**坏**　器高4.4㎝，口縁径12㎝，底部径９㎝を測る。底部外面に糸切り痕跡を残し，口縁部はほぼ直立する。８世紀後半から９世紀代にかけてのものであろう。Ａトレンチの溝底から出土。

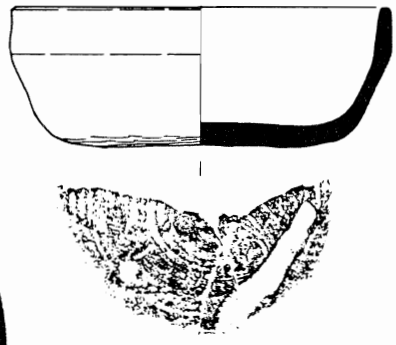
3．**甕片**　壺の破片に混じって出土。器厚1.1㎝ほどで外面に平行叩き目，内面に浅い同心円文を付ける。

4．**甕片**　厚み0.8㎝の甕の小片である。

5．**甕片**　厚み１～1.1㎝あり，外面は磨耗している。内面は深い同心円文を押圧している。



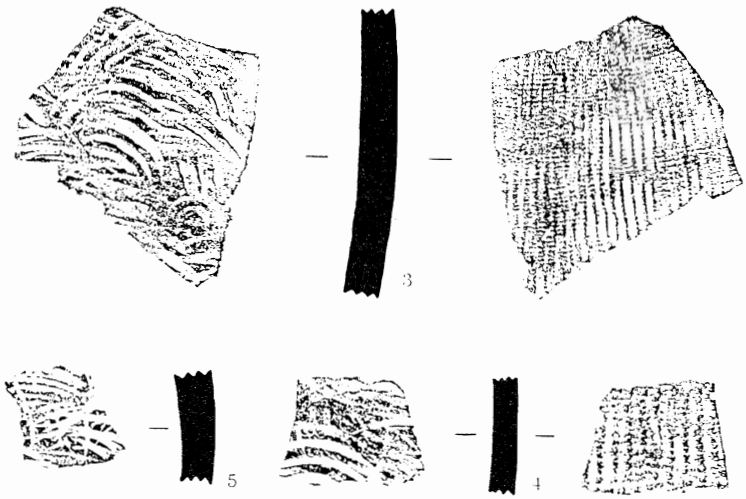
1. 濠底出土壷実測図



2. 濠底出土須恵器坏実測図

0 5cm

0 10cm




周濠内出土須恵器片実測図

0 5cm

**第 6 図　昭和 55 年度出土遺物**

### (2) 平成２年度の調査

平成２年度の調査は，対象を墳丘全体とし，土層観察用畦を東西南北にあわせて設定し，地山まで掘り下げた。

#### ア．墳丘について

調査の結果，墳丘裾北東部，南東部分は盛土の流出が著しい。しかし南西部分は築造当初の姿をよく残すものと思われ，南北方向の墳裾ラインは南西隅でほぼ直角に屈折して直線的にのびる東西方向南辺の墳裾ラインへとつながる。この墳裾ラインは南北方向東辺では不明瞭であるが，東西方向北辺で直線的なラインが確認されており，南辺と北辺でほぼ平行に走る。この間隔は15mである。

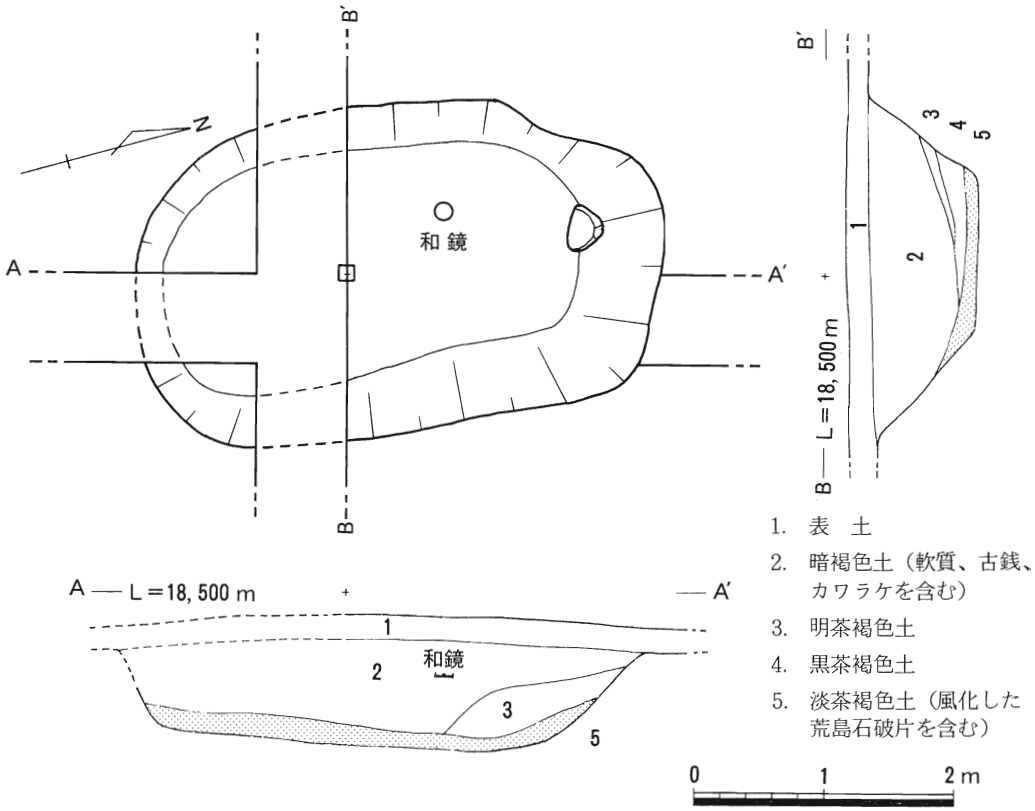
墳丘の築造方法は，旧地表面からまず周濠を掘り，一辺15mの正方形の墳丘基盤を形成し，旧地表上に盛土を施して整形し，墳頂部に一辺6.5mの平坦部をつくる。最大盛土高は1.5mを測る。盛土は基盤から約50cm上までは黄色粘土ブロックを含んだ淡茶褐色土（第４層）と，暗灰褐色土（第５層）を10cmずつ交互に版築状に盛土するが，それほど硬くつきき固めたような印象はなかった。その上には淡～暗茶褐色土（第１～第３層）を盛土するが，これらの層は地山を思わせるほど硬く固められていた。

#### イ．周濠について

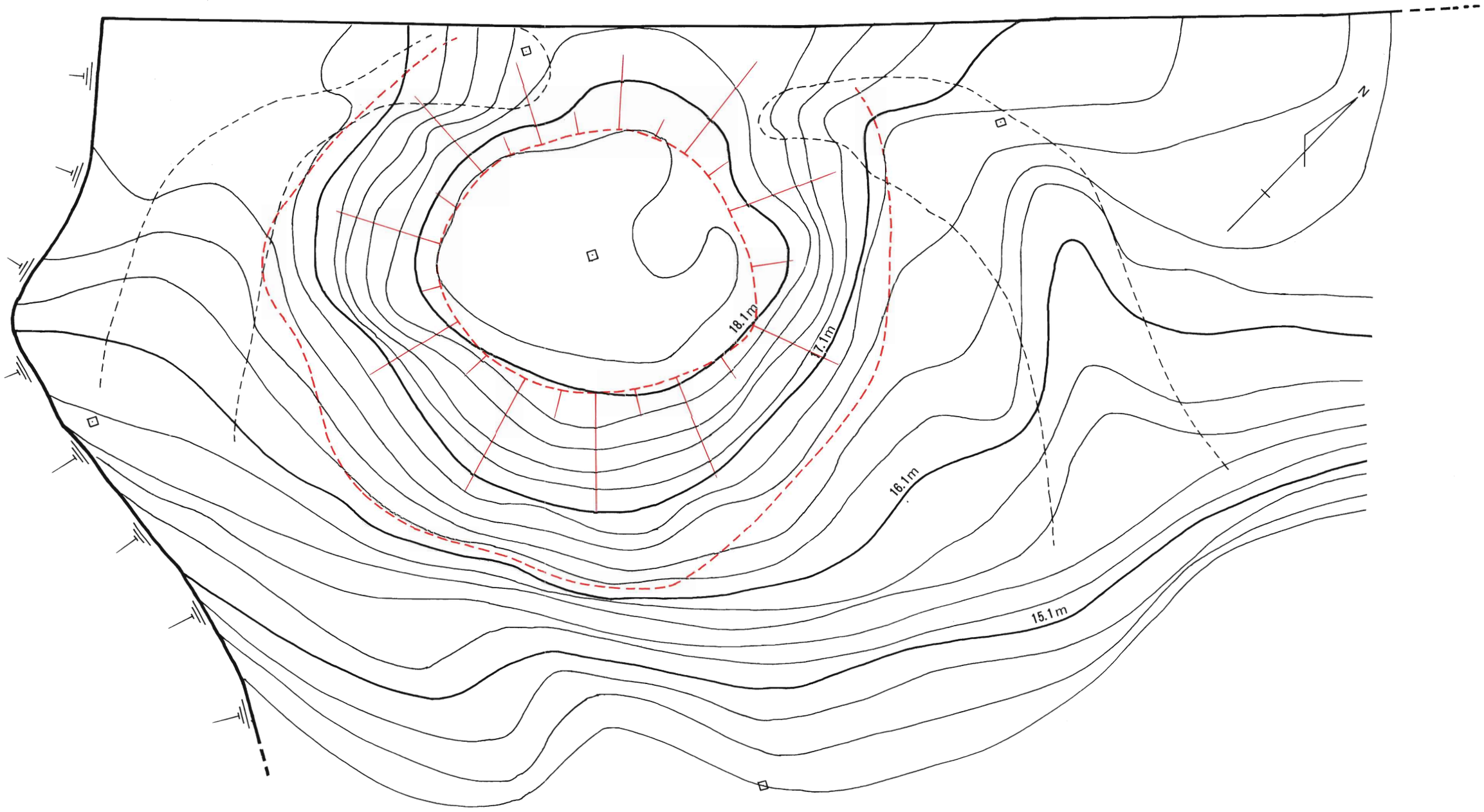
平成２年度の調査では，南辺，北辺，東辺で周濠が検出された。周濠の南西隅の内側のラインはほぼ直角に屈曲しており，本墳が方形であることをよくあらわしているが，北東端，南東端の盛土は著しく流出しているため，周濠はその部分で途切れる。本来は直角のコーナーを持って連続していたものと推定される。残存する周濠は南辺部分でよく残っており，最大幅1.8m，最大深40cmを測る。この周濠内側上端部付近からは浮いた状態で７世紀代の須恵器坏（№６，７）と低脚高坏（№５）が検出されたが，原位置を保つものではなく，墳丘上方からの流れ込みと考えられる。東辺の周濠はあまり原位置を保っておらず，不整形状を呈している。最大幅は３m，最大深は20cmである。周濠内出土遺物はなかった。北辺の周濠は外側が後世の溝によって切られ，幅は不明であるが，内側のラインは一直線状に残っている。最大深は20cmである。この周濠底部に密着して擬宝珠状のつまみをつけた7世紀の須恵器の蓋が２個体（№１，２）検出され，いずれもつまみを上に向けて置かれていた。

### ウ．主体部について

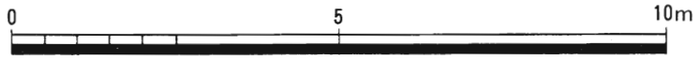
墳丘中心部からは主軸をほぼ南北に合わせた4.0×2.5mの略長方形の土壙が検出された。しかし後世に盗掘を受けたものと見られ，内部には軟らかい暗褐色の土が充満しており，堆積土中に中世以降のカワラケ，古銭が多量に含まれていた。また，直刀もしくは短刀と見られる鉄器１，鎌倉時代の和鏡も１面検出された。この土壙底には風化した荒島石の岩石破片が厚さ約15cmで一面に堆積しており，岩石片の中には人為的に加工された面を持つ破片も含まれるため，築造当初はこの荒島石を使った石棺，または石櫃状のものが埋納されていたものと推定される。

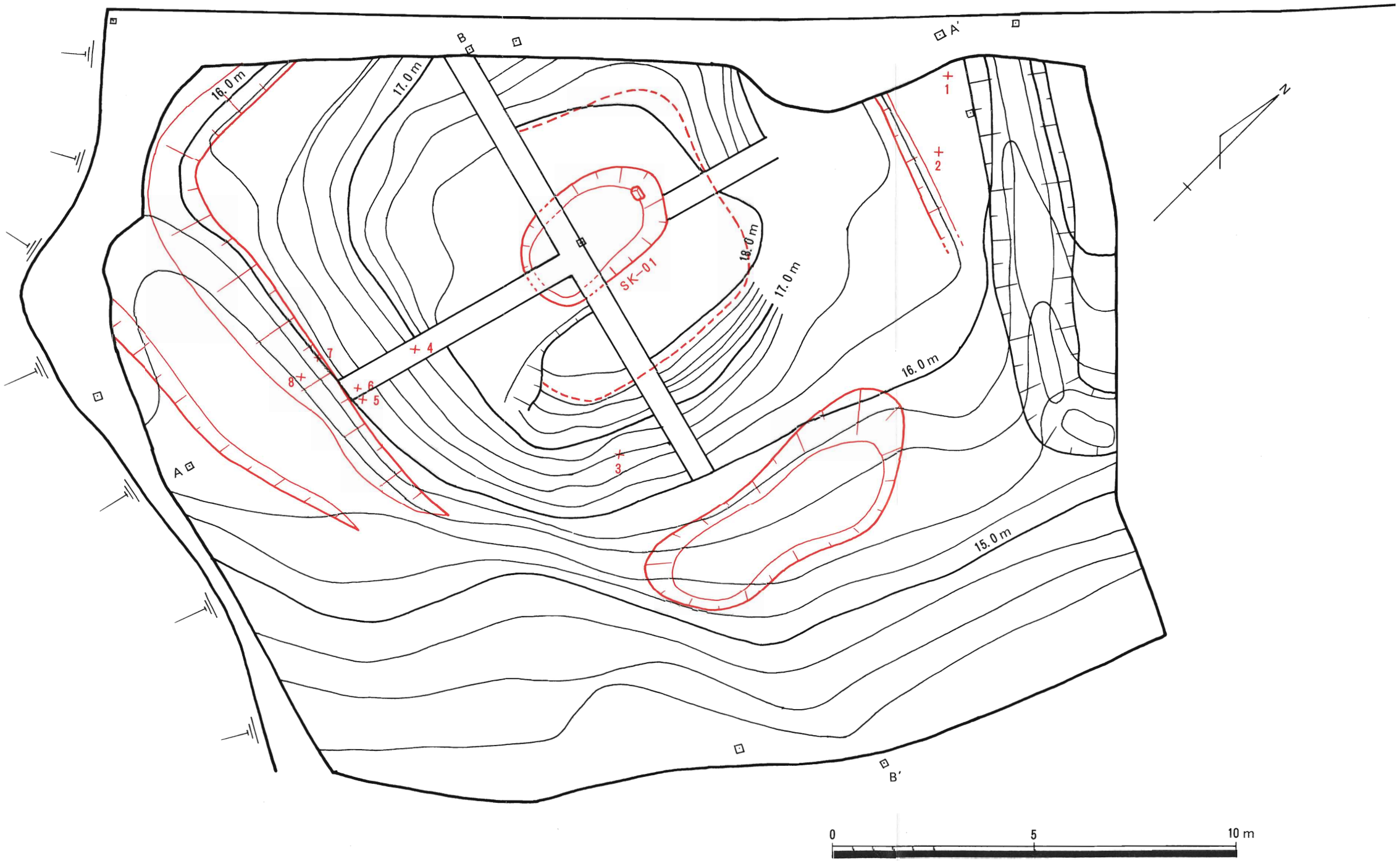



第７図　ＳＫ－０１遺構図

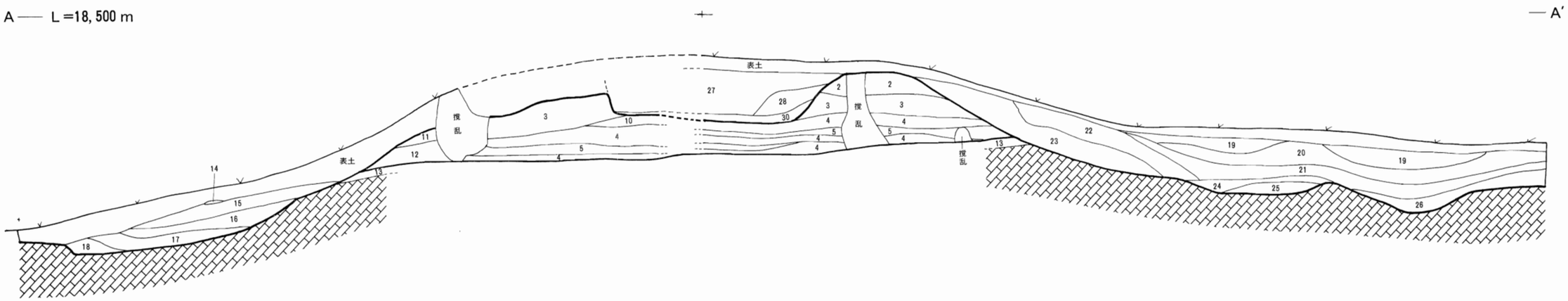


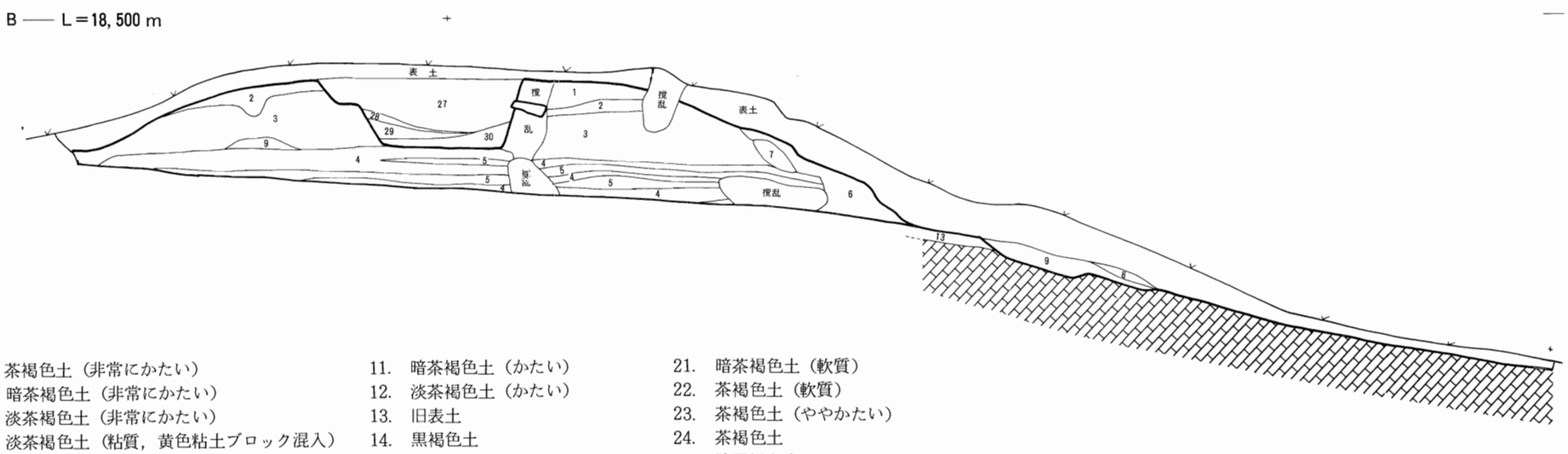

第 8 図　平成 2 年度向荒神古墳調査前墳丘測量図






第 9 図　平成 2 年度向荒神古墳調査後測量図




1. 茶褐色土（非常にかたい）
2. 暗茶褐色土（非常にかたい）
3. 淡茶褐色土（非常にかたい）
4. 淡茶褐色土（粘質，黄色粘土ブロック混入）
5. 暗灰褐色土（やや粘質）
6. 暗茶褐色土（軟質）
7. 暗灰色土
8. 淡黒灰色土
9. 黒灰色土
10. 淡黄褐色土（かたい）
11. 暗茶褐色土（かたい）
12. 淡茶褐色土（かたい）
13. 旧表土
14. 黒褐色土
15. 茶褐色土（軟質）
16. 淡黒褐色土
17. 黒褐色土
18. 暗黄褐色土
19. 真砂土
20. 黄色粘土（白色ブロック含む）
21. 暗茶褐色土（軟質）
22. 茶褐色土（軟質）
23. 茶褐色土（ややかたい）
24. 茶褐色土
25. 淡黒褐色土
26. 淡茶褐色土（粘質）
27. 暗褐色土（軟質，古銭，カワラケを含む）
28. 明茶褐色土
29. 暗茶褐色土（かたい）
30. 淡茶褐色土（風化した荒島石破片を含む）

0　2　4 m

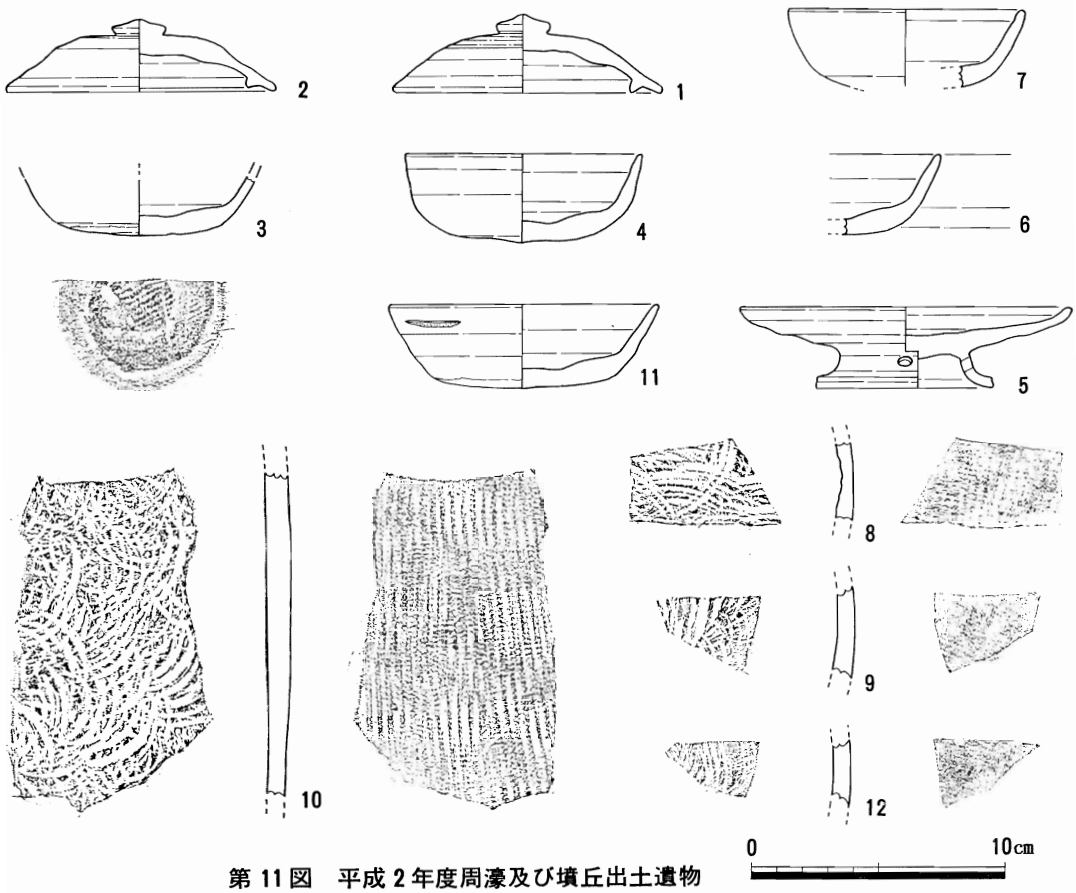
**第10図　墳　丘　断　面　図**

エ．出土遺物について

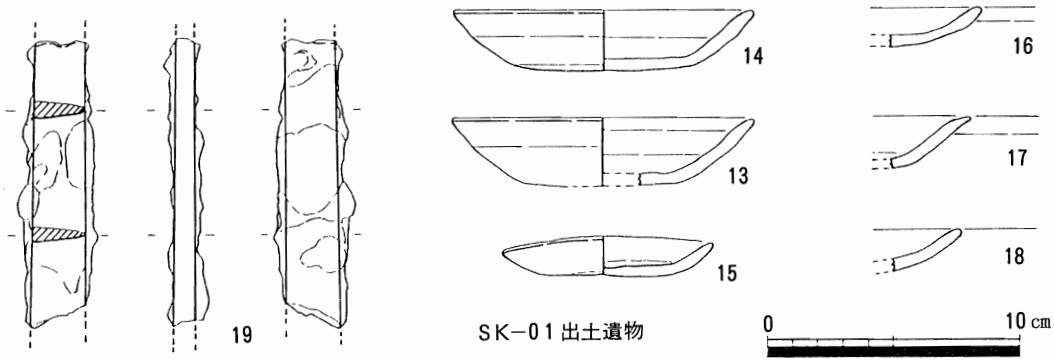
1. 北辺の周濠底に密着し，つまみを上にした状態で出土した須恵器の蓋である。口径8.2cm，器高3.1cmを測る。天井部に擬宝珠状のつまみを付ける。天井部外面は回転ヘラケズリの後ナデで仕上げており，やや肥厚気味の天井部からなだらかに口縁部に至り，端部とほぼ同じ高さのかえりを付ける。7世紀中頃のものと考えられる。

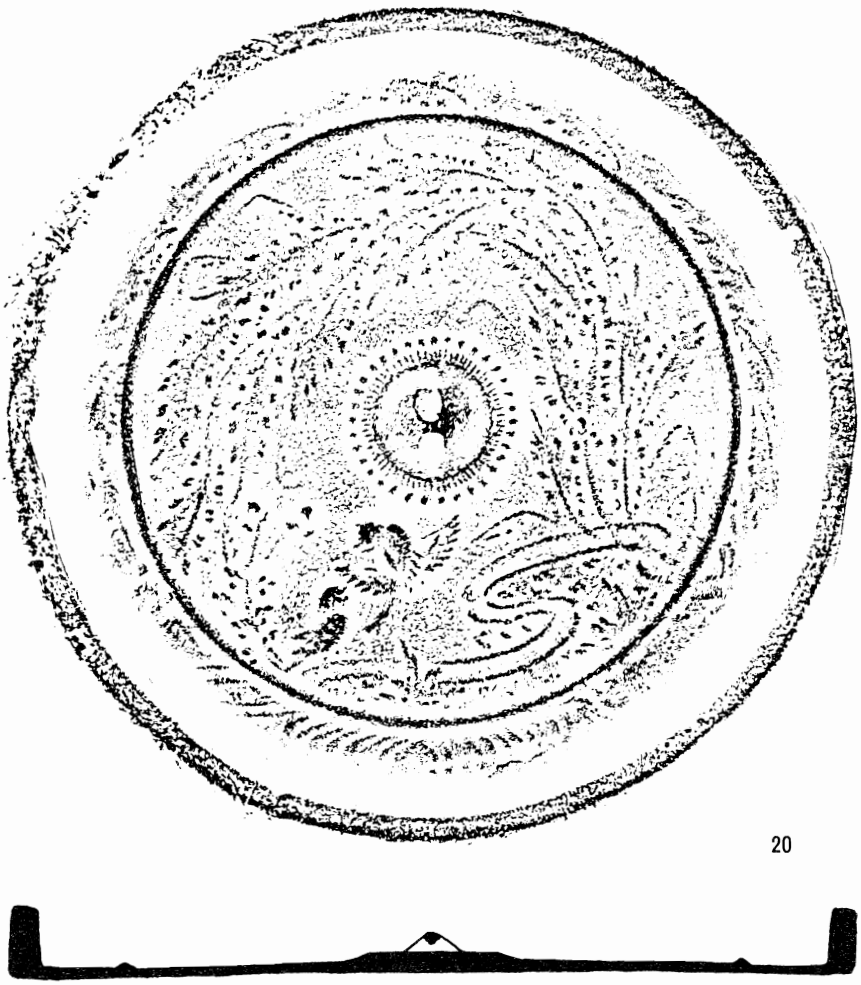
2. №1と同じく北辺の周濠底に密着した状態で出土した須恵器の蓋である。口径10.5cm，器高2.8cmを測る。天井部に擬宝珠状のつまみを付ける。天井部外面は回転ヘラケズリの後にナデで仕上げており，やや肥厚気味の天井部からなだらかに口縁部に至り，端部より短いかえりを付ける。7世紀中頃のものと思われる。

3. №2と同じ位置から出土した須恵器の坏身片である。口縁部を欠損しているが，肥厚気味の底部から上外方に直線的にのびて口縁部にいたるものであると考えられる。坏部外面はヘラ切り後ナデで調整し，一部ハケ目状の痕跡が認められる。7世紀中頃のものであると考えられ，№2の蓋坏とセットをなすものである。

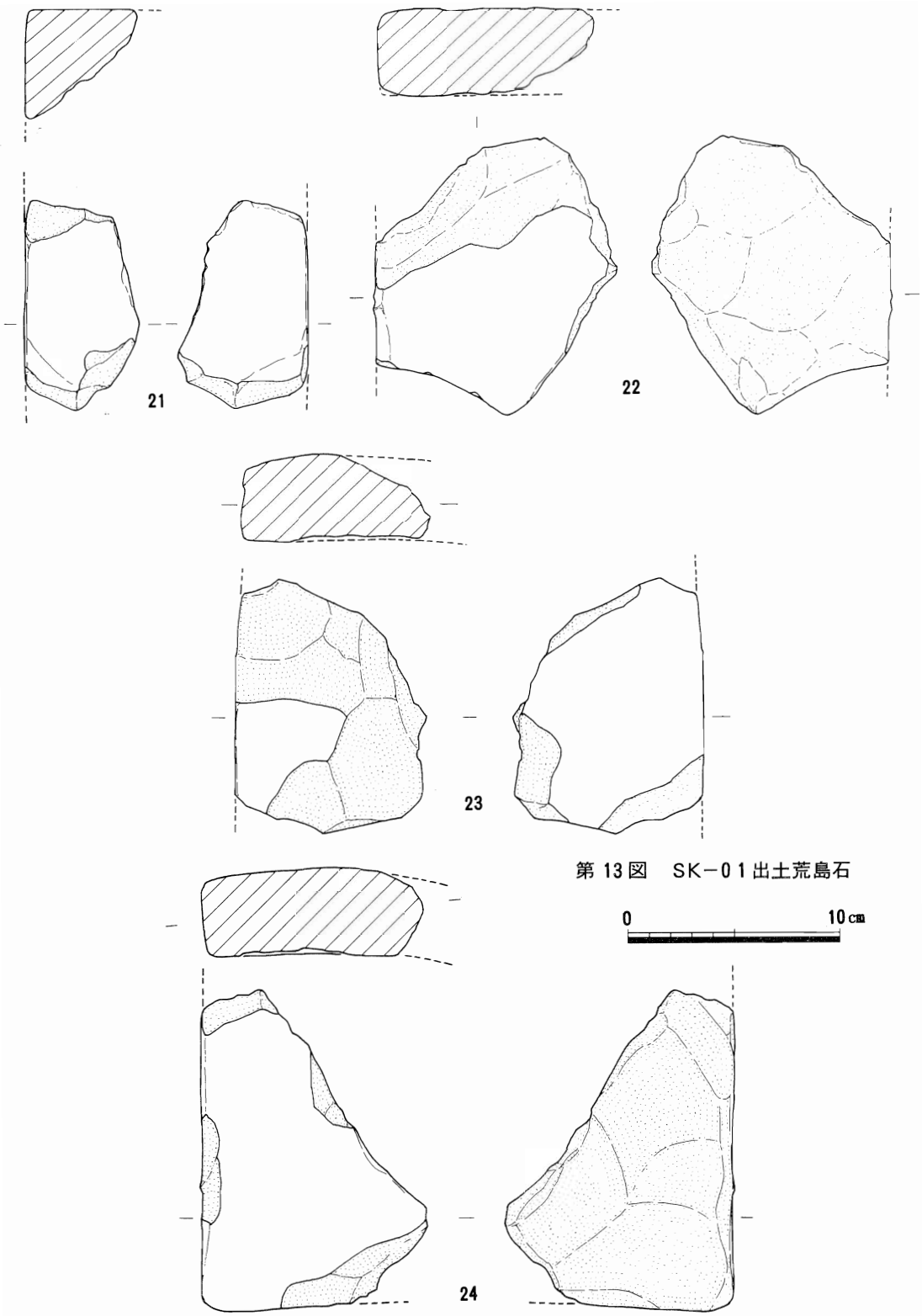



第11図　平成2年度周濠及び墳丘出土遺物




第12図　SK−01出土和鏡




第13図　SK－01出土荒島石

4. 南辺の周濠内側淵部分から出土した須恵器の坏身である。口径9.2cm，器高3.5cmを測る。やや肥厚気味の底部から上外方にのび，口縁部にいたる。端部はまるくおさめる。底部外面はヘラ切り後ナデで調整する。7世紀中頃のものであると考えられる。

5. 南辺の周濠埋土中と墳裾部分から出土した土器片が接合したもので，須恵器の低脚の高坏である。口径13.0cm，器高3.2cm，底径7.0cmを測る。坏部は浅く大きく開いて口縁部にいたり，端部付近で屈曲して斜上方に立ち上がる。端部はまるくおさめる。脚部は大きく外弯して短く開く。端部は平坦におさめる。脚部には3方から円形の透かし穴を穿つ。

6. 墳裾南側から出土した須恵器の坏片である。口径，器高は共に不明である。やや肥厚気味の底部からゆるやかに立ち上がり直線的に口縁部にいたる。端部はまるくおさめる。7世紀中頃のものと考えられる。

7. №6と近い位置から出土した須恵器の坏片である。口径は推定9.2cmである。形態に付いては№6とほぼ同じで7世紀中頃のものであると考えられる。

8. 南側の墳丘中腹部の堆積土中から出土した須恵器の壺甕類の破片である。器厚は最大7㎜を測る。外面に格子状タタキ痕，内面に同心円状当て具痕が残る。

9. №8と同位置から出土した須恵器の壺甕類の破片である。器厚は最大8㎜を測る。外面に回転カキ目痕，内面に同心円状当て具痕が残る。

10. 東側の墳丘中腹部の堆積土掘削中に出土した須恵器の壺甕類の破片である。器厚は最大1.0cmを測る。外面に格子状タタキ痕，内面に同心円状当て具痕が残る。

11. 墳丘掘削時に表土下から出土した須恵器の坏身破片である。推定口径10.4cm，器高3.3cmを測る。やや肥厚気味の底部からゆるやかに立ち上がり，直線的に口縁部にいたる。端部はまるくおさめる。底部外面はヘラ切り後ナデで調整しており，7世紀中頃のものであると考えられる。

12. 墳丘表土掘削中に出土した須恵器の壺甕類の破片である。器厚は最大8㎜を測る。外面に回転カキ目，内面に同心円状当て具痕が残る。

13. 主体部中から出土したカワラケの破片である。推定口径12.0cm，器高2.7cmを測る。平坦な底部から立ち上がり，やや内弯気味に開きながら口縁部にいたる。端部はまるくおさめる。調整は風化が著しく不明である。

14. 主体部中から出土したカワラケである。口径12.0cm，器高2.4cmを測る。平坦な底部から立ち上がりやや内弯気味に開きながら口縁部にいたる。端部はまるくおさめる。調整は風化が著しく不明である。

15. 主体部内堆積土中から出土した小型のカワラケである。やや焼き歪みがあるが，口径8.3

cm，器高1.6cmを測る。平坦な底部からゆるやかに立ち上がり，内弯気味に開きながら口縁部にいたる。端部はまるくおさめる。

16. 主体部堆積土中から出土したカワラケの破片である。口径，器高はともに不明である。平坦な底部からゆるやかに立ち上がり，内弯気味に短く開いて口縁部にいたる。端部はまるくおさめる。

17. 主体部内堆積土中から出土したカワラケの破片である。口径，器高はともに不明である。口縁部はゆるやかに立ち上がり，内弯気味にのびたのち，口縁部で外反する。

18. 墳丘表土掘削中に出土したカワラケの破片である。口径，器高はともに不明である。口縁部は内弯気味に短くのびて口縁部にいたる。端部はまるくおさめる。

19. 主体部内堆積土中から出土した鉄製品で直刀または短刀の破片である。残存長11.5cm，刀幅2.2cmを測る。

20. 主体部内堆積土中から出土した秋草双鳥鏡である。鏡面を下に向けた状態で出土した。面径11.2cm，縁高0.9cm，直角式中縁をもつ。菊座鈕を中心として取り囲むように萩が描かれ，鈕の下方に雀が２羽配されている。界圏は一重圏で細く低い。

21. 主体部底に堆積していた荒島石の破片である。直角に屈曲した角を残す。

22. 主体部底に堆積していた荒島石の破片である。平坦な石材で厚さは４cmを測る。

23. 主体部底に堆積していた荒島石の破片である。ゆるやかなカーブを持ち，厚さは４cmを測る。

24. 主体部底に堆積していた荒島石の破片である。ゆるやかなカーブを持ち，厚さは４cmを測る。

# ４．出土遺物の検討

## (1) 古銭について

主体部上面及び主体部埋土中からは，かわらけ皿に混じって多量の古銭が検出された。古銭は総数162枚で，うち銭名の判別できるものは131枚で，26種類に及ぶ。初鋳年の最も古いものは唐の「開通元宝」，最も新しいものは「朝鮮通宝」である。このうち最も多いのが「寛永通宝」の52枚であり，次に大きな比率を占めるのが北宋銭の41枚である。

これらの中で錆化のため癒着した状態で出土したため，一括埋納されたと判断される古

銭が２例（A，B）ある。Aは21枚連結しており，「開通元宝」～「朝鮮通宝」，Bは「開通元宝」～「元豊通宝」である。Aの古銭の孔の中には炭化した繊維質が残っており，当初は紐で連結されていたものと推定されるが，その年代幅の広さは注目に値するところである。

これらの古銭はいずれも後世に主体部が攪乱された後，「荒神さん」として祀られるようになってから供えられたものと考えられるが，全体の1/3を江戸時代の寛永通宝が占め，もう一方で北宋銭が1/3を占めている。従って数量的に見れば，10世紀～11世紀代と江戸時代の二度のピークがあったと考えられる。

**SK－01　出土銭一覧**

| 銭貨名 | 初鋳年 | | 枚数 | 銭貨名 | 初鋳年 | | 枚数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 開通元宝 | 唐 | 621 | 5 | 元符通宝 | 北宋 | 1098 | 2 |
| 淳化元宝 | 北宋 | 990 | 1 | 聖宋元宝 | 北宋 | 1101 | 6 |
| 至道元宝 | 北宋 | 995 | 1 | 大観通宝 | 北宋 | 1107 | 2 |
| 景徳元宝 | 北宋 | 1004 | 2 | 政和通宝 | 北宋 | 1117 | 2 |
| 天禧通宝 | 北宋 | 1017 | 1 | 宣和通宝 | 北宋 | 1119 | 1 |
| 天聖元宝 | 北宋 | 1023 | 2 | 嘉定通宝 | 南宋 | 1208 | 1 |
| 明道元宝 | 北宋 | 1032 | 2 | 至大通宝 | 元 | 1310 | 1 |
| 皇宋通宝 | 北宋 | 1039 | 4 | 洪武通宝 | 明 | 1368 | 12 |
| 至和元宝 | 北宋 | 1054 | 1 | 永楽通宝 | 明 | 1408 | 13 |
| 熙寧元宝 | 北宋 | 1068 | 3 | 宣徳通宝 | 明 | 1426 | 1 |
| 元豊通宝 | 北宋 | 1078 | 5 | 寛永通宝 | 江戸 | | 52 |
| 天祐通宝 | 北宋 | 1086 | 4 | 朝鮮通宝 | | | 3 |
| 紹聖元宝 | 北宋 | 1094 | 4 | 判読不明 | | | 31 |
| 合　計 | | | | | | | 162 |

### (2) 和鏡について

日本に鏡が初めてもたらされたのは弥生時代前期末頃，朝鮮半島から舶来したものと考えられている。中国においては鏡は基本的に化粧道具であったが，国内においては弥生時代中期以降に後漢鏡が多量にもたらされ，舶載鏡を模した仿製鏡も多く作られるが，玉，剣とともに主長の主権の象徴，祭祀の呪具として用いられ，墳墓に副葬された。この思想は古墳時代にも続くが，古墳時代も後期に入ると古墳の副葬品は武具，馬具が主流となり，鏡の重要性は薄れてゆく。

飛鳥，奈良時代に入ると仏教文化とともに唐鏡がもたらされる。国内においてもこれらの鏡を模して蠟形鋳造した唐式鏡や，唐鏡を踏み返した製作の容易な踏返鏡が作られ全国に普及するが，除魔用として舎利容器と共に塔に納置されたり，修法祈禱，仏像や堂内の壮厳に用いられるようになった。しかし鏡背文様は依然として中国の模倣に留まるものであった。

平安時代に入って遣唐使が廃止され，唐からの文物の流入が途絶えた頃から次第にわが国独特の文様要素が目立つようになる。製作技法においても軟らかい鋳造用の土（真土）の上に直接ヘラで文様を描くようになり，しだいに唐様からはなれて和様化する。文様は「松」「菊」「鶴」「雀」といった“花鳥”の意匠へと移行し，繊細でいきいきとした表現ができるようになった。また，鏡は末法思想の高まりとともに経塚に埋納されたり，化粧道具としても使われるようになったため，全国に急速に普及していった。この頃からの国産鏡を「和鏡」と総称する。この和鏡は平安時代後期に成立し，鎌倉時代に技巧的に確立期を迎え，室町時代には柄鏡も出現し，江戸時代へと続く。

島根県内においては現在39ヶ所，44面が確認されている。特に出土鏡を中心とした把握しかできなかったが，社寺に奉納された鏡を加えるとかなりの数にのぼるものと思われる。出土鏡について見ると，経塚，古墓に埋納された例が多く，平安～室町時代の和鏡が出土している。その他の出土例では，修法壇や池，また，松江市下黒田遺跡SK－01出土の場合のように備前焼の壷の中にかわらけ，古銭，モミガラ，人毛と共に納められた例など祭祀遺構からの出土も見られる。これらは室町時代を中心とした例が多いように見受けられる。本墳出土の和鏡は「秋草双鳥鏡」であり，その形態から鎌倉時代のものと推定され，「荒神さん」への供献物であると考えられるが，鏡面右方に径５㎜の孔が１ヶ所穿たれており，本来は社寺に奉納されたか，掛鏡として祭礼用に使われたものではないかと考えられる。

# 5．小　　結

昭和55年度，平成２年度の発掘調査の結果，本墳は四周に周濠を巡らし，主軸を南北方向にとる方墳であることがわかった。墳丘の規模は墳裾部分で一辺15m，最大盛土高1.5mを測り，盛土下部は版築状にていねいに築いている。墳頂部には一辺6.5mの平坦部を持ち，中央部分に長辺を南北にとる4.0×2.5mの略方形の墓壙を掘り込む。主体部の調査では，墓壙中からは軟らかい流入土に混じって本墳とは直接関係がないと思われる古銭，かわらけ，和鏡が検出されたため，本墳の墓壙は後世に盗掘などによる攪乱を受けた後，「荒神さん」として祀られるようになり，これらの遺物が供えられたものと考えられる。ただし，この墓壙底には荒島石の破片が厚さ約15cmで一面に堆積しており，本来はこの石材を使った石棺などが埋納されていたものと推定される。

本墳の築造年代については，南辺および北辺の周濠中から出土した須恵器を手がかりとせざるを得ないが，いずれも７世紀中頃のものであり，昭和55年の調査では平安時代にまで下ると思われる須恵器も出土している。これを以って築造年代にあてはめるのは薄葬令がしかれた当時の時代背景から考えると疑問が残る。松江市内の古墳の例を見ると，周濠中および墳裾から古墳築造年代とはおよそ合致しない年代の須恵器が出土する例が竹矢町中竹矢後１号墳[註4]，坂本町細曽１号墳[註5]などに見られ，古墳築造後時期を経て須恵器を供える祭祀があったらしいことが指摘されているため，本墳についても同じことが考えられる。よって築造年代は断定できないが，本墳の墳丘規模等から考えると古墳時代中期頃までさかのぼるものと推定するのが妥当であると考えられる。

いずれにせよ，乃木地区では最大級の方墳であり，古墳群を形成せずに独立して存在することから見ると，当地域で相当な勢力を有した豪族により築造されたことは間違いないものと思われる。

註１．松江市教育委員会「野田遺跡　向荒神古墳」1981年
　２．石材の鑑定は国立島根大学教育学部教授三浦清氏に御教示いただいた。
　３．和鏡の鑑定は大阪市立博物館学芸員前田洋子氏に御教示いただいた。
　４．松江市教育委員会「中竹矢後１号墳　長峯遺跡」1986年
　５．松江市教育委員会「細曽１号墳」1987年

# 島根県内和鏡一覧

| No. | 種別 | 遺跡名 | 所在地 | 遺構・概要 | 遺物・概要 | 備考・文献名 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | | 宮島神社跡 | 安来市利弘町前谷 | 詳細不明 | 「保元元年丙子十二月日」の銘をもつ県下では最古の在銘鏡像。銅鏡の表面に地蔵菩薩を鋲止めにし、表面に文字を鋳出す。（平安）<br>面径20.8cm、厚さ1mm | 島根県大百科事典<br>宮島神社所蔵 |
| 2 | | 祖父谷遺跡 | 広瀬町祖父谷 | 詳細不明 | 「長生殿鏡」１面<br>径10.8cm、縁高1cm（直縁式）、厚さ3.5mm、重さ315ｇ、素文亀形鈕で二重圏<br>銭貨39枚、北宗銭が大半 | |
| 3 | 鏡出土地 | 市向遺跡 | 伯太町安田宮内 | 詳細不明 | 詳細不明 | |
| 4 | 古墳 | 向荒神古墳 | 松江市上乃木町 | 一辺15ｍの方墳<br>盗掘された主体部埋土中から出土 | 「秋草双鳥鏡」１面（鎌倉）<br>面径11.2cm、縁高0.9cm、重さ180ｇ<br>菊座鈕、直角式中縁、一重圏<br>菊座鈕を中心として取り囲むように萩が描かれ、鈕の下方に雀が2羽配されている。 | |
| 5 | 古墓 | 桧山7号墓 | 松江市上乃木町 | 0.8×0.8ｍ円形 | 「松枝散双鶴鏡」１面（鎌倉？）<br>面径11.6cm、縁高7mm、亀形鈕を中心として内区の上下に飛鶴を配し上方の一羽は松枝をくわえる。<br>鈕の部分に鉄製のつまみがつけられ、二次的に使用された可能性がある。 | 島根県埋蔵文化財報告書Ⅲ集<br>昭和46年 |
| 6 | 古墓 | 桧山16号墓 | 松江市上乃木町 | 2.0×2.0ｍ円形<br>盛土はほとんどなく内部構造は不明 | 「亀甲地双雀鏡」１面（鎌倉？）<br>面径10.7cm、縁高7mm、亀形鈕の上方に飛び交う二羽の雀を配し、内区と外区は突帯一条によって分けるほか、一面に三星ある亀甲を配している。<br>法螺貝残欠１、刀身１、鍔片１、 | 島根県埋蔵文化財報告書Ⅲ集<br>昭和46年 |
| 7 | 祭祀遺構 | 下黒田遺跡 | 松江市大庭町下黒田 | ＳＫ－０１中出土<br>33.8cm×43.7cm×17cmの略長円形の土壙に備前焼の壷を横位に置き、その中にかわらけ16以上、和鏡１、古銭29、モミガラ、人毛を入 | 「柴垣柳樹双雀鏡」１面（室町）<br>面径9.8cm、縁高0.9mm、重さ175ｇ<br>備前焼の双耳壷か四耳壷（15ｃ後半） | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | れる | | |
| 8 | 古　墓 | 的場遺跡 | 松江市本庄町 | 170cm×75cm×10cmの長方形中世墓中から出土 | 「菊花楓双鳥鏡」１面<br>面径10.7cm、縁高0.7cm、厚さ1.0cm、重さ80ｇ<br>素鈕、一重圏、直角式中縁<br>同安窯系青磁碗×１、口径15.6cm、器高6.9cm、内面に草花文、外面にクシ状工具による沈線<br>かわらけ、鉄釘 | |
| 9 | 鏡出土地 | 熊野遺跡 | 八雲村熊野 | 詳細不明 | 双雀鏡 | |
| 10 | | 新宮神社蔵 | 玉湯町 | 詳細不明 | 和鏡 | |
| 11 | 祭祀遺跡 | 奥川井遺跡 | 大東町奥川井金穴 | 消滅 | 和鏡、土師質土器 | |
| 12 | 経　塚 | 刈山経塚 | 大東町下佐世 | 8.5×7.5ｍ、高さ1.5ｍの円形古墓、頂部に須恵質大壺を置いて盛土し、その上に約2ｍの範囲に角礫を敷き詰める | 「洲浜双鳥鏡」１面（平安後期）<br>直角式中縁、一重圏、花形低座鈕<br>「流水散花双鳥鏡」１面 | 大東町の遺跡Ⅲ　平成3年 |
| 13 | 経　塚 | 後ノ廻経塚<br>（神原経塚） | 加茂町神原、三代境 | 一辺4尺四方の経塚から出土、壷の口を鏡で蓋する | 湖州鏡「湖州真石家念二叔照子」銘入り１面<br>素文六花鏡で素鈕、面径13.8cm、縁高0.8cm、厚さ0.3cm、重さ185ｇ（中国宋時代）<br>四耳壷　口径11.2cm、器高30.3cm、胴部最大径24.8cm | 加茂町の遺跡　平成３年<br>大原郡郷土資料第２集　昭和30年<br>中林季高氏蔵 |
| 14 | 祭祀遺跡 | 大蛇子遺跡 | 加茂町砂子原 | 室町期の修法壇<br>高く南に張り出す修法壇、マウンド上より石鉢、和鏡古銭、瓦器等出土 | 「菊散紋双鳥鏡」 | 加茂町の遺跡　平成３年度 |
| 15 | 祭祀遺跡 | 布須神社和鏡出土地 | 加茂町宮ノ谷 | 神社下方の護符池より和鏡出土 | 「散菊双鳥鏡」１面（室町期）<br>面径9.1cm、縁高1cm、厚さ0.2cm、重さ160ｇ<br>亀形鈕、二重圏、直角式中縁 | 加茂鳥の遺跡　平成３年度<br>大原郡郷土資料第２集　昭和30年 |
| 16 | 鏡出土地 | 松賀和鏡出土地 | 加茂町東谷 | 猪尾元宮地の東に対峙する丘陵端にあり、荒神を祀る | 「散菊双鳥鏡」１面（室町期） | 加茂町の遺跡　平成３年度 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 付近から偶然出土。<br>付近に地名「荒神谷」あり | | |
| 17 | 鏡出土地 | 相保廻和鏡出土地 | 加茂町相保廻 | 相保廻谷口西側低丘陵端、小堂のある付近より出土と伝う。 | 「洲浜菊双雀鏡」１面（室町期？）<br>面径9.7cm、縁高0.7cm、厚さ0.4cm<br>亀形鈕、二重圏、直角式中縁 | 加茂町の遺跡　平成３年度<br>大原郡郷土資料第２集　昭和30年 |
| 18 | 鏡出土地 | 深田和鏡出土地 | 加茂町深田 | 舌状低丘陵端から出土と伝う。 | 「雛松双鳥鏡」１面（室町期？）<br>面径10.1cm、縁高0.9cm、厚さ0.2cm、重さ180ｇ<br>亀形鈕、二重圏、直角式中縁 | 加茂町の遺跡　平成３年度<br>大原郡郷土資料第２集　昭和30年 |
| 19 | | 神原神社蔵 | | 詳細不明 | 「菊散文双雀鏡」１面（室町期？）<br>面径9.3cm、縁高0.8cm、厚さ0.3cm、重さ130ｇ<br>二重圏、直角式中縁 | 加茂町の遺跡　平成３年度<br>大原郡郷土資料第２集　昭和30年 |
| 20 | | 光明寺蔵 | | 詳細不明 | 「菊紋松樹双鶴鏡」１面 | 加茂町の遺跡　平成３年度 |
| 21 | | | 加茂町大竹栗原 | 詳細不明 | 「松双鶴鏡」（鎌倉？）１面（平安末）<br>面径11.5cm、縁高0.9cm、厚さ0.4cm、重さ330ｇ<br>亀形鈕、一重圏、直角式中縁 | 大原郡郷土資料第２集　昭和30年 |
| 22 | | 貴船神社蔵 | 加茂町南加茂 | 詳細不明 | 「鏡名不明」１面、松と雀を配する<br>面径11.2cm、縁高0.7cm、厚さ0.2cm、重さ170ｇ<br>一重圏、直角式中縁 | 大原郡郷土資料第２集<br>貴船神社蔵 |
| 23 | 祭祀遺跡 | 大歳遺跡 | 木次町東日登大歳 | 詳細不明 | 和鏡、刀等 | |
| 24 | 古　墓 | 策霊山古墓 | 三刀屋町六重迫奥256-3 | 中世の修法塚か？ | 鉄鏡？鉄片？<br>石鉢、古銭、刀子、土師質土器（皿） | 三刀屋町の遺跡Ⅱ　平成元年度 |
| 25 | 横　穴 | 森谷横穴A-1号 | 三刀屋町森谷 | 横穴墓から出土 | 菊散文の和鏡（鎌倉～室町？） | 三刀屋町の遺跡Ⅱ　平成元年度 |
| 26 | 鏡出土地 | 清水荒神塚遺跡 | 三刀屋町殿河内上殿河内 | 正福寺跡から東へ約300ｍ急峻な丘陵の南麓に位置する。埋納壙２穴 | 和鏡、鉄鍋、刀、土師質土器、円礫 | 三刀屋町の遺跡Ⅲ　平成２年度 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 27 | 鏡出土地 | 上谷尻遺跡 | 三刀屋町里坊郷上 | 詳細不明 | 和鏡出土の伝承あり | |
| 28 | 城　　跡 | 上山城跡 | 吉田村上山 | 山城 | 「菊花双雀鏡」、古銭 | |
| 29 | 古　　墳 | 蟻神社古墳 | 平田市万田町 | 円墳、組合せ石棺の棺外出土 | 和鏡、小菊花浮文を施す<br>宋銭 | |
| 30 | 鏡出土地 | 地釜遺跡 | 平田市釜浦 | 詳細不明 | 「亀鈕松樹双雀鏡」「菊座鈕松波双雀鏡」<br>「亀鈕松双雀鏡」（室町期） | |
| 31 | 古　　墓 | 立石遺跡 | 平田市小境町北垣上立石 | 詳細不明 | 小形鏡、土師質土器、古銭 | |
| 32 | 鏡出土地 | 鰐淵寺蔵 | 平田市鰐淵寺 | 石製経筒とともに出土 | 湖州鏡「八葉鏡」１面、直径13.3cm<br>鏡背に「湖州真正石(家)念二叔照子」銘あり<br>湖州鏡「素文円鏡」１面、面径12.8cm<br>鏡面に僧仁光が蔵王宝窟に仁平二年(1152)戊申六月十日酉癸に施入し奉ったとの針書銘がある | 平田市誌　昭和44年 |
| 33 | 古　　墓 | 誓願寺古墓 | 大社町杵築西下大土地 | 消滅 | 和鏡、人骨、古銭 | |
| 34 | 古　　墓 | 鷺浦古墓 | 大社町鷺浦 | 安部荒神社の祠の下から短刀の入った大壺と多数の古銭、和鏡２面が出土した。 | 「菊花双雀鏡」２面（室町）１５ｃ後半<br>Ａ径6.3cm、縁高0.7cm、厚さ1.5mm、重さ60ｇ<br>Ｂ径6.9cm、縁高0.3cm、厚さ1.5mm、重さ60ｇ | 島根県埋蔵文化財報告書Ⅲ |
| 35 | 経　　塚 | 寺ノ峯経塚 | 西ノ島町美田小向 | 標高182ｍの高田山中腹標高115ｍの尾根の先端に立地する。東西13.2ｍ、南北7.4ｍ、高さ50cmの石積み施設。１２ｃ代 | 「梅樹飛雀鏡」１面<br>径10cm、縁高5.5mm、重さ120ｇ花座鈕で一重圏<br>「草花双鳥鏡」１面（平安）<br>径10.6cm、縁高6mm、重さ110ｇ菊座鈕で一重圏<br>「網双鳥鏡」１面（平安）約1/3を欠損する<br>復元径9.5cm、縁高5mm、菊座鈕で一重圏<br>灰釉四耳壺１（越州窯系）、青白磁小壺１、金銅製鍔１、銅銭１（宣和通宝）、土師器片１、かわらけ皿片、鉄片数十片、小刀残欠、鉄鉢数片 | 隠岐国黒木の遺跡<br>隠岐島前指定 |
| 36 | 鏡出土地 | 宮ノ前遺跡 | 西ノ島町美田 | 詳細不明 | 和鏡 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 37 | 散布地 | 社ノ谷遺跡 | 匹見町紙祖三葛 | 詳細不明 | 銅鏡（平安） | |
| 38 | 寺院跡 | 興源寺跡 | 津和野町後田中の原 | 詳細不明 | 小鏡、香炉 | |

A-1. 政□通宝

A-6. 元□通宝

A-2. 皇宋通宝(北宋1039)

A-7. 紹聖元宝(北宋1094)

A-3. 紹聖元宝(北宋1094)

A-8. □□□宝

A-4. 熙寧元宝(北宋1068)

A-9. 開通元宝(唐　621)

A-5. 聖宋元宝(北宋1101)

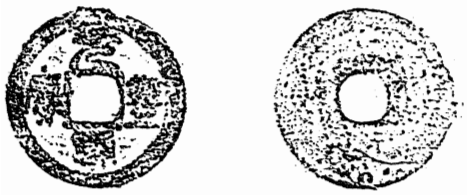
A-10. 聖宋元宝(北宋1101)

ＳＫ－０１出土古銭拓本（Ａ）

A-11. 永楽通宝(明　1408)

A-12. 聖宋元宝(北宋1101)

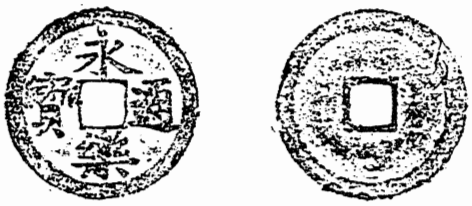
A-13. 至道元宝(北宋 995)



A-14. 元豊通宝(北宋1078)

A-15. 政和通宝(北宋1111)

A-16. 熙寧元宝(北宋1068)



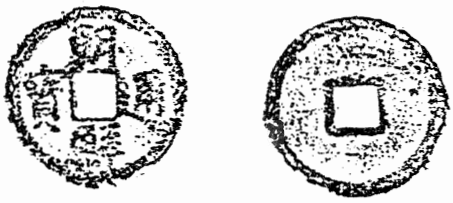
A-17. 永楽通宝(明　1408)

A-18. 景徳元宝(北宋1004)

A-19. 聖宋元宝(北宋1101)

A-20. 聖宋元宝(北宋1101)

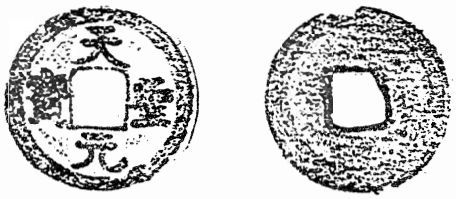
ＳＫ－０１出土古銭拓本（Ｂ）



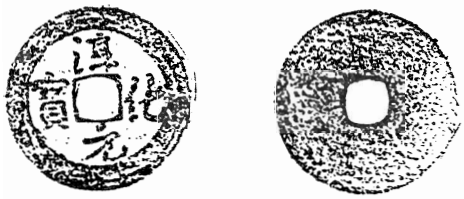
A-21. 朝鮮通宝

B-5. □□□宝

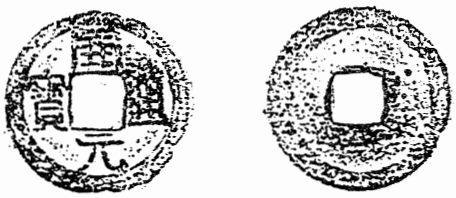
B-1. 元豊通宝(北宋1078)



B-2. 天聖元宝(北宋1023)



B-3. 淳化元宝(北宋 990)



B-4. 開通元宝(唐　621)

ＳＫ－０１出土古銭拓本（Ｂ）

1．開通元宝(唐　621)

2．

3．

4．景徳元宝(北宋1004)

5．天禧通宝(北宋1017)

6．天聖元宝(北宋1023)

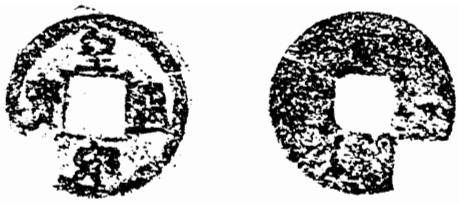
7．明道元宝(北宋1032)

8．

9．皇宋通宝(北宋1039)

10．

ＳＫ－０１出土古銭拓本



11.

16.

12．至和元宝（北宋1054）

17．元祐通宝（北宋1086）

13．熙寧元宝（北宋1068）

18.

14．元豊通宝（北宋1078）

19.

15.

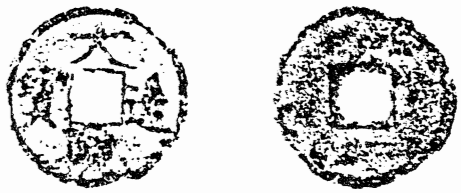
20.

ＳＫ－０１出土古銭拓本

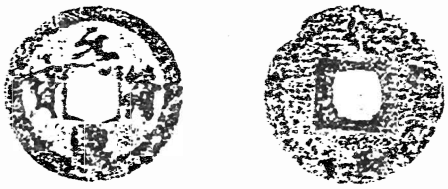
21．紹聖元宝（北宋1094）

26．大観通宝（北宋1107）

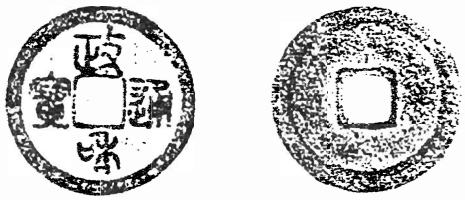
22．



27．



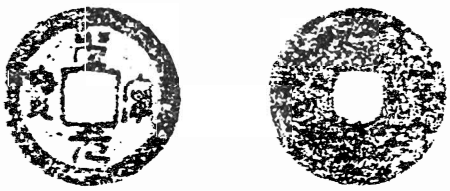
23．元符通宝（北宋1098）



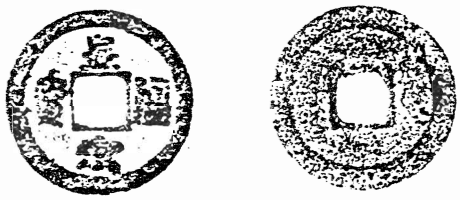
28．政和通宝（北宋1117）

24．

29．宣和通宝（北宋1119）

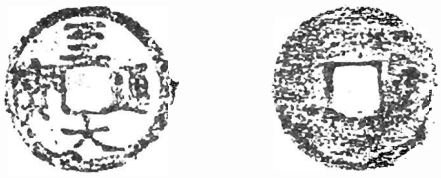


25．聖宋元宝（北宋1101）



30．嘉定通宝（南宋1208）

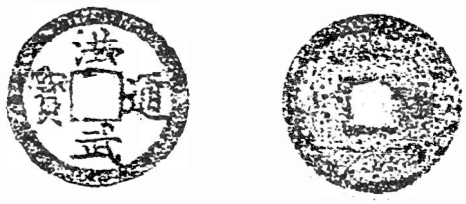
ＳＫ－０１出土古銭拓本



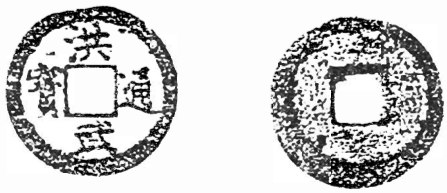
31．至大通宝（元 1310）

36．

32．洪武通宝（明 1368）



37．

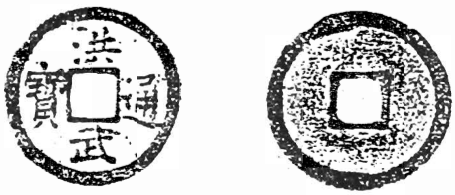


33．

38．

34．

39．

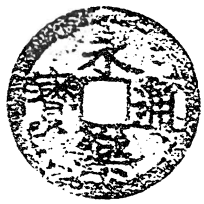
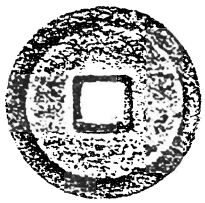


35．

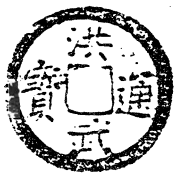
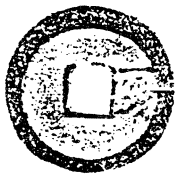
40．

ＳＫ－０１出土古銭拓本

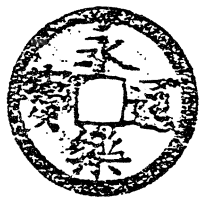
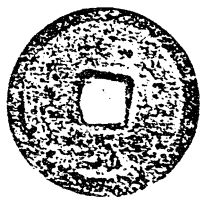
41.

46.

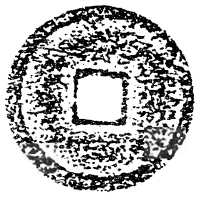
42.

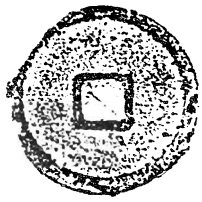
47.

43.

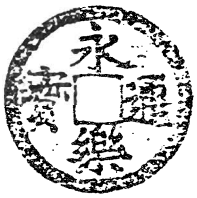
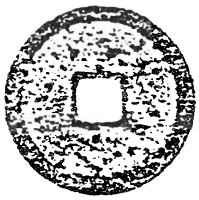
48.



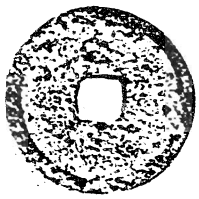
44.永楽通宝(明 1408)



49.

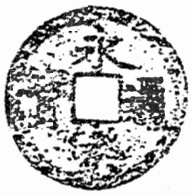



45.



50.

SK－01出土古銭拓本



51.

56．寛永通宝

52.

57.

53.

58.

54.

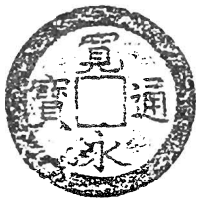
59.

55．宣德通宝（明 1426）

60.

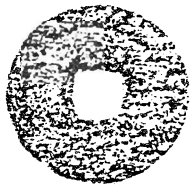
ＳＫ－０１出土古銭拓本

61.

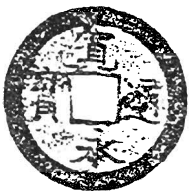


66.

62.

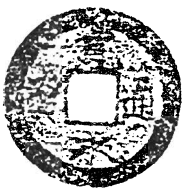


67.

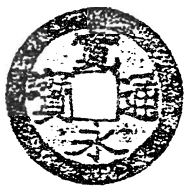
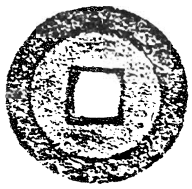


63.

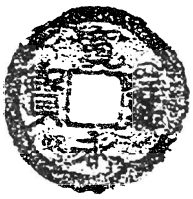
68.



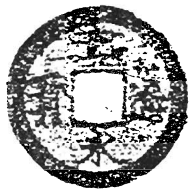
64.

69.



65.

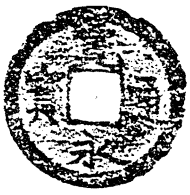


70.

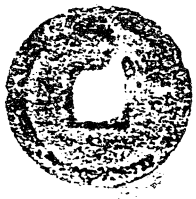
ＳＫ－０１出土古銭拓本

71.

76.



72.



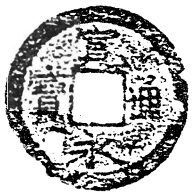
77.

73.

78.

74.

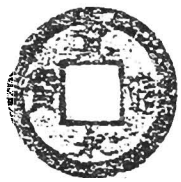
79.



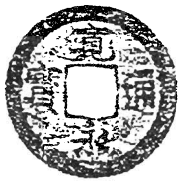
75.

80.

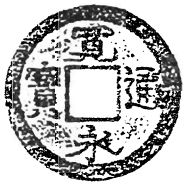
ＳＫ－０１出土古銭拓本



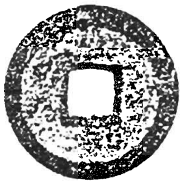
81.



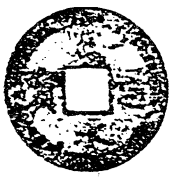
82.



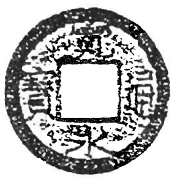
83.



84.

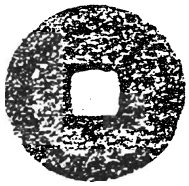


85.

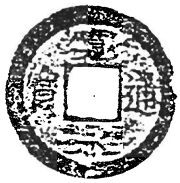
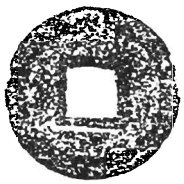


86.

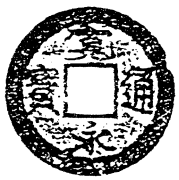
87.



88.

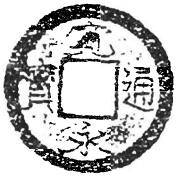



89.



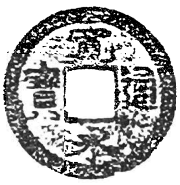
90.

ＳＫ－０１出土古銭拓本



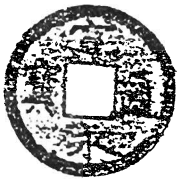
91.

96.



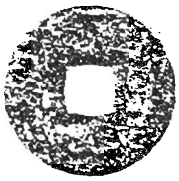
92.

97.

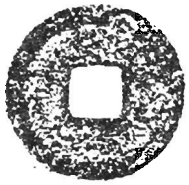


93.

98.

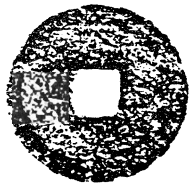


94.



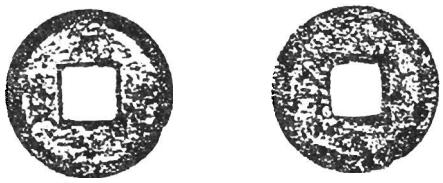
99.

95.



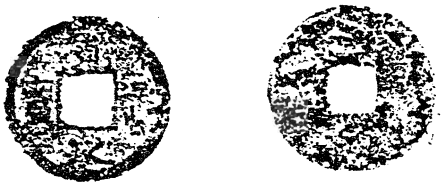
100.

ＳＫ－０１出土古銭拓本



101．

106．

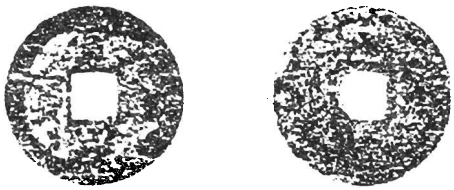


102．

107．

103．

108．判読不明



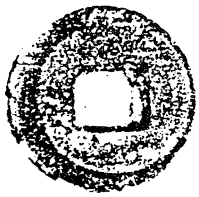
104．

109．

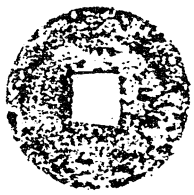
105．

110．

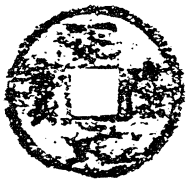
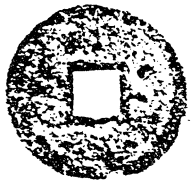
ＳＫ－０１出土古銭拓本



111．

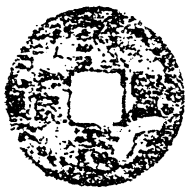
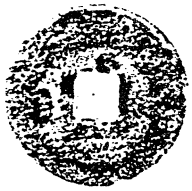


116．

112．

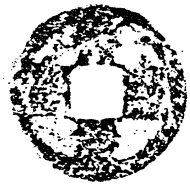
117．

113．

118．

114．

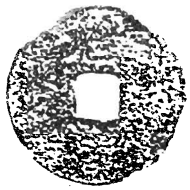


119．

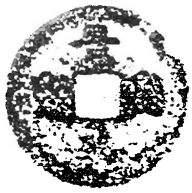
115．

120．

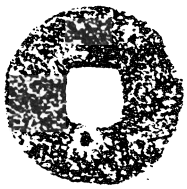
ＳＫ－０１出土古銭拓本



121.



126.



122.

127.

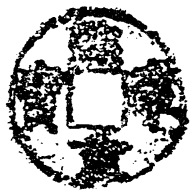
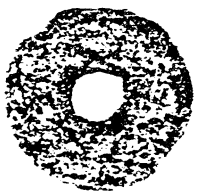
123.

128.

124.

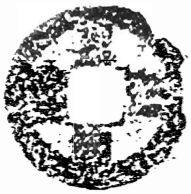
129.

125.

130.

ＳＫ－０１出土古銭拓本



131.

136.

132.

133.

134.

135. 朝鮮通宝

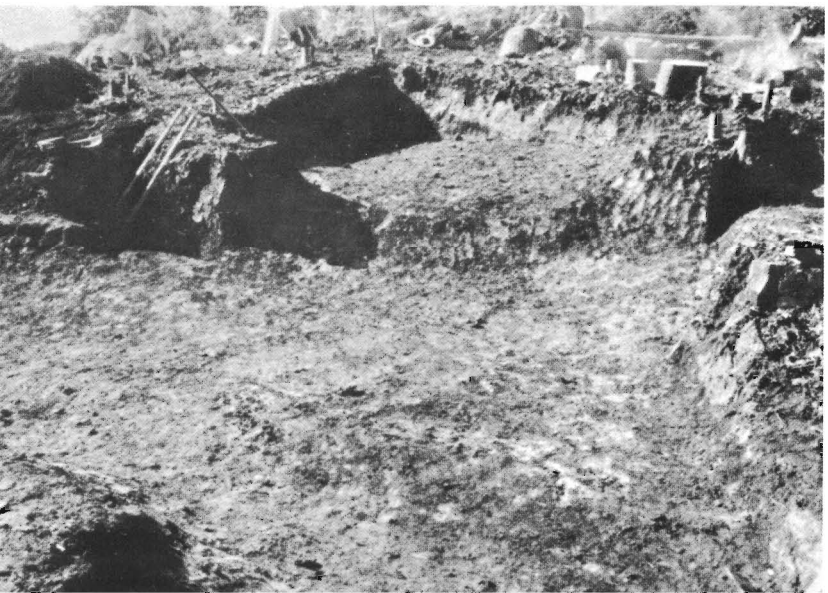
ＳＫ－０１出土古銭拓本

# 図　　版

1. 当貫地区全景（右向荒神古墳）　昭和 55 年当時

2. 向荒神古墳周濠
（手前北西角付近）
昭和 55 年

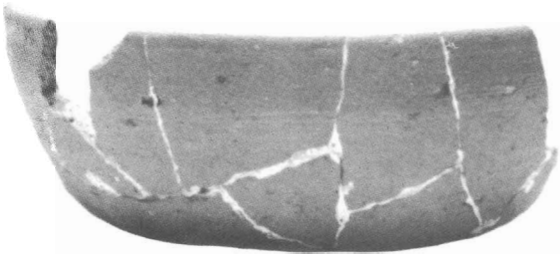
3. 当貫 33 区南東角落込み
（古墳周濠角部）
昭和 55 年



4. 向荒神古墳周濠
北西角付近
昭和 55 年

P. L. 3

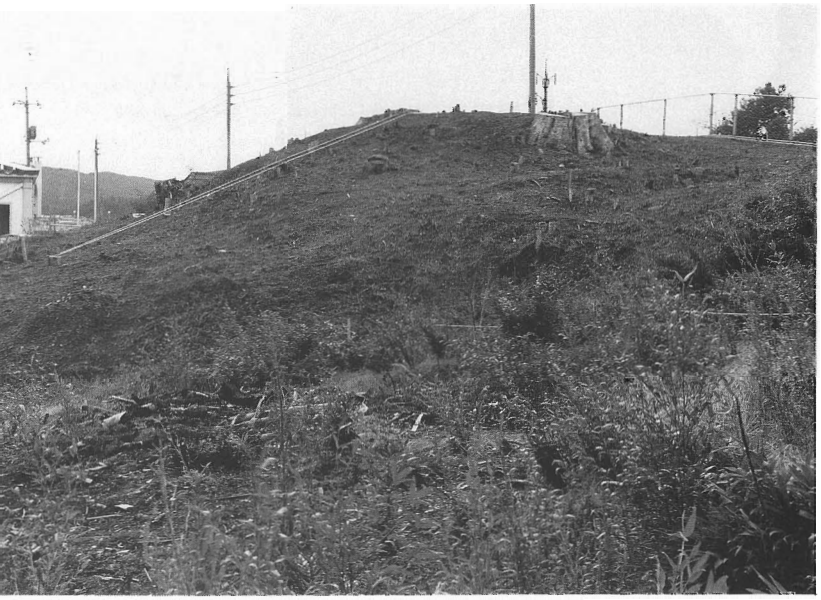
5. 向荒神南部Ｂトレンチ，
周濠底須恵器坏身出土状況
昭和 55 年



6. 須恵器坏身

7. 須恵器壺

8. 平成２年度
調査前近景（東方より）

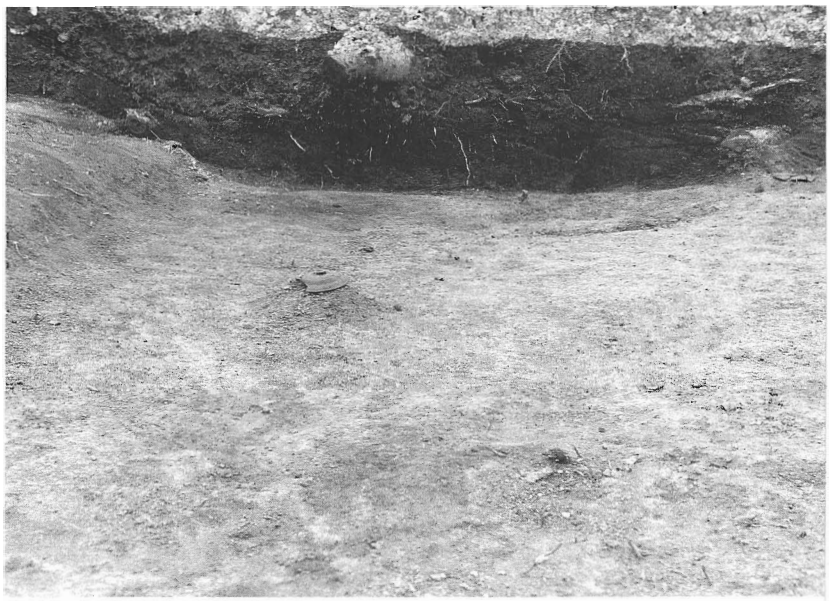


9. 調査前近景（北方より）

10. 調査前近景（南方より）

P. L. 5

11. 北側周濠検出状況



12. 北側周濠中遺物出土状況
（手前No. 2．奥No. 1）

13. 北側周濠中出土須恵器
No. 2

14. 北側周濠中出土須恵器
No. 1

15. 南側周濠堆積土状況

16. 南側周濠完掘状況

P. L. 7

17. ＳＫ－０１検出状況

18. ＳＫ－０１中和鏡出土状況

19. ＳＫ－０１中古銭Ａ
出土状況

20. ＳＫ－０１堆積土状況
（西から）

21. ＳＫ－０１堆積土状況
（北から）

22. ＳＫ－０１荒島石堆積状況

23. ＳＫ－０１荒島石堆積状況
（東から）

24. ＳＫ－０１完掘状況
（北から）

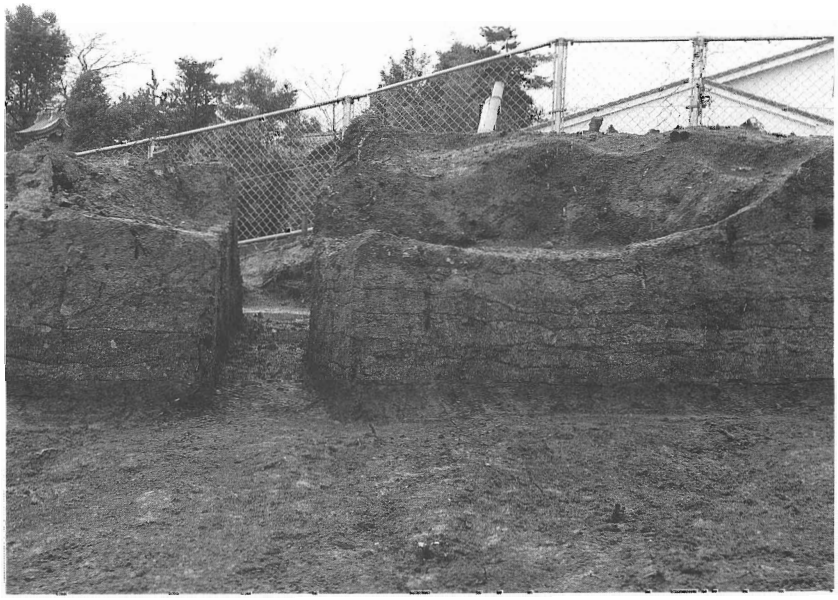
25. 向荒神古墳完掘状況
（北から）

26. 向荒神古墳完掘状況
（東から）

27. 墳丘南東部盛土除去後

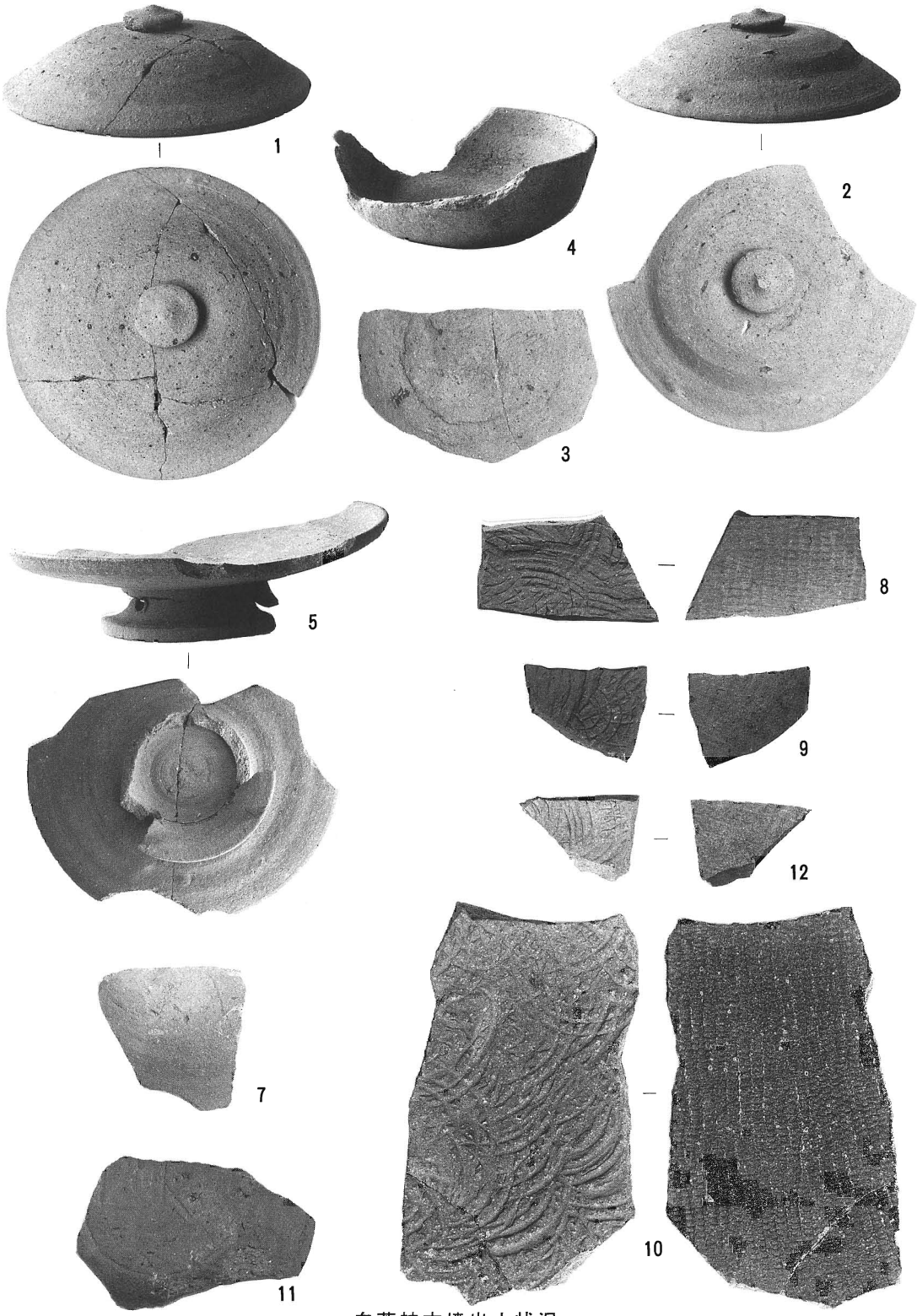
28. 墳丘南東部盛土除去後
（ＳＫ－０１付近）

29. 墳丘東側盛土除去後



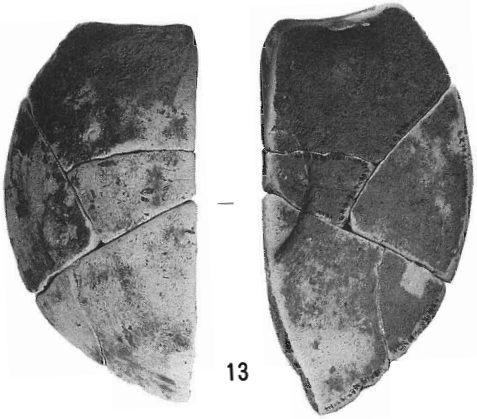
30. 墳丘東側盛土除去後
（ＳＫ－０１付近）

31. 墳丘盛土除去後（北から）

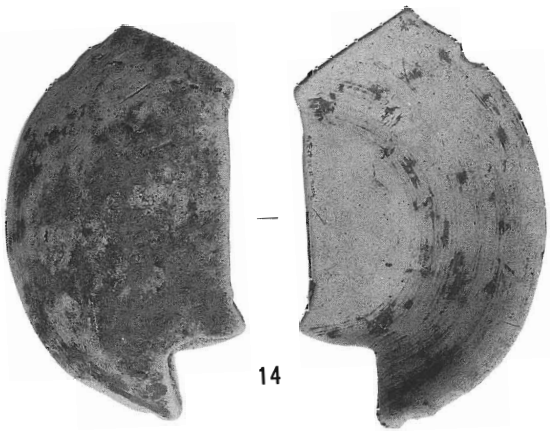



向荒神古墳出土状況

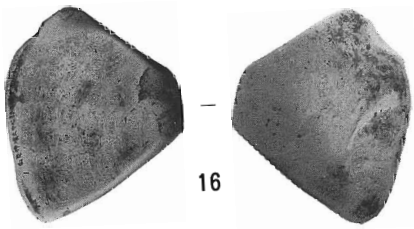
P. L. 13



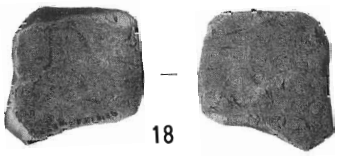
13



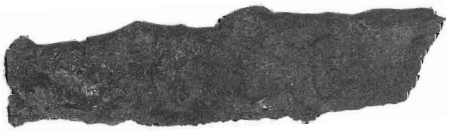
14



16



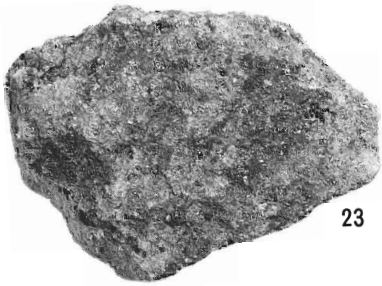
18



19

17

15



23

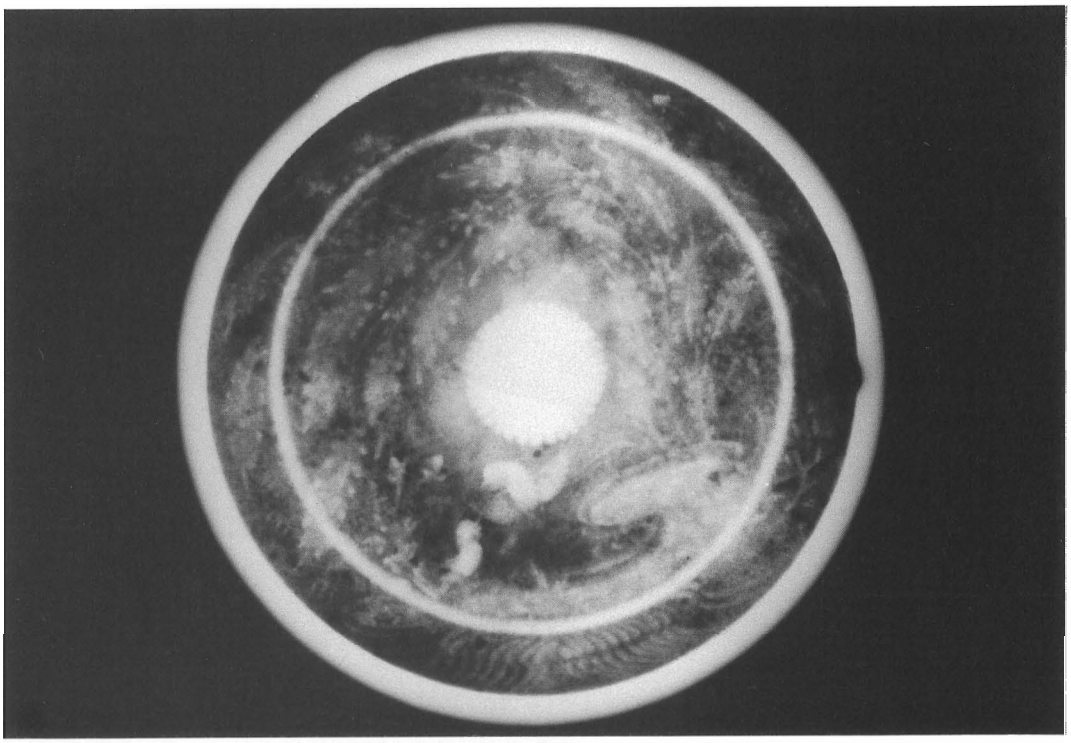
22

24

21

向荒神古墳出土遺物

20.　ＳＫ－０１出土秋草双鳥鏡



同上Ｘ線写真

向荒神古墳発掘調査
報　告　書

1992年３月

発　行　　松江市教育委員会

印　刷　　有限会社 谷 口 印 刷
松江市母衣町89